

主幹*麻生路郎

川柳新誌

六月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和四年六月一日發行（第一回一日發行）

川柳雜誌

第六卷第六號

川柳雜誌社發行



奉迎川柳會

日時 六月五日(水曜)午後七時

場所 南區日本橋一丁目交又點

北の辻東入 日本橋俱樂部

兼題 「喜び」 三句

兼題の天地人に路郎先生染筆の短冊一葉宛贈呈

(出席者の入賞に限る)

會費 三十錢

初心者來會を大いに歡迎す

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳界のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌 第六卷第六號 目次

感想・評論

川柳の中にある俳句
新時代の佗びに就て
石切さん
この子の思想
啄木ミ川柳
灰燼の中にて
浪六氏のこゝろ

研究・其他

椿の庭から
川柳略語解
川柳水無月秘
月評
伯林太與里
川柳假の姿(六)
漫畫題索引(四)
川柳類題索引(四)
一路集
老夫婦
寢臺
念佛
本社六厘坊忌

川柳書架

各地柳壇
(表紙)
題字
編輯後記
吉田きよし
小出 實重
路郎二柳子琴人

創作

川柳塔
長谷川一徹
住田亂助
伊藤素人
岩本愚陀
伊藤素人
水谷鮎美
川合舟々
中島鐵州
橋本二柳子
島田翠峰
牧田普門
友井貴山
楊井緒南
奧田雪緒
粒々集
蛭子省二
近作柳樽
淺井冷々子
松盛琴人
朝田新水
高橋かほる
松角桂二
六角桂二
岩崎柳風
酒井駒人
中澤濁水
中見光路
安西杏三
清水桐郎
清水光郎
富士野鞍馬
諸家



病みついた大阪なれど懐しく
 妻になき身を現在の幸として
 看護婦をやめて女給で暮します
 病上り春だくみ髭を剃り
 鶏を怒れば猫で言ひ返し
 断つて歸したあこに冷めた酒
 算盤をさがせば汽車になつてゐる
 チップにも足らぬ玩具を嬉しがり
 平等に平等に陽はかゝやけり
 滋養價値認められても鯛なり
 かしわ手に無理な願ひの音もこもり
 雨が降れば降るで俗人やかましい
 葱畑思ひく折れてゐる
 運轉手春風云ふ風を受け
 かたくなに下りてきもせぬ子猿がる
 肥靈をのこし菜畑の花ざかり
 女等の帶のゆるみも春さなり
 隣室はひつきりなしの見舞客
 育てたを玩具になつたなごぬかし
 ひよつみすりや會ふかも知れぬ鬚を剃り
 飯事に造る墓場も哀れなり
 不足なく育つた啞の派手な柄
 迂り臺滑らない子が一人ゐる
 三十にして洋装のあはれなり

福岡 同 同 長崎 同 同 福岡 同 同 神戸 同 同 神戶 同 同 別府 同 同 鳥取 同 同 同 同

獏 同 同 草 同 同 不 同 同 卯 同 同 郊 同 同 晃 同 同 同 同 聽 同 同 同 同

々 木 忘 生 村 卓 松



蔭ほしに金紗の羽織裏を見せ
 琴の友理想に遠くかけはなれ
 身は慎んで女將のさばけよう
 夢の續きを考へて夜は白け
 馬上から見下けたやうに話される
 新婚旅行家庭日記も持つて出る
 十姉妹たゞエサだけが情なり
 白粉へ氣兼ねしてゐる女教員
 内容も可成り知つてゐる古本屋

小泥棒推参

吳つぷり泥棒小氣味悪くなり
貞淑な妻を叱つて氣が晴れる
親切にされて娘は困るなり
愛の巢に隣り合せに母は住み
石段の長さ只々有難し
施療院子供淋しく病んでゐる
病床の窓へも櫻咲きほこり
御恵を恩に着せるはうましく
さうせ死ぬ身にはをかしい人の慾
蒲團まで冷たき心持ち初め
女性美が頬の窪みに消ゆんす
俺の骨拾うて呉れど暇乞
子も貰はずにテリヤ飼つてゐる
癩兵のニセで片手ないものを

神 同 堺 同 大 同 神 同 松
戸 阪 戸 江

楠 同 清 同 幸 同 柳 同 紫
川
堂 路 泉 亭 吻

兵 同 堺 同 螢 同 螢 同 螢 同 大 同 大 同
庫 ケ ケ ケ 阪 阪

白同松同皎同柳同し同與同善同
水け詩
生風月月る夫治



旦那はんが旦那はんがを下女かぞへ
はつきり春の香りのモガ二人
錯覺ミ友無雜作に云つてのけ
丸刈にしても夫の立姿
悪友の機轉女房の氣が直り
挨拶もそこゝに早髪のこと
家柄を言うて兩々親承知せず
大木の倒れる様に父は逝き
辨償をするミ云ふのへ腹を立て
子の晴着一枚欲しい手内職
さもすれば先の女房が口に出で
春淺し嘘の輕さのそれもよし
愛の巢に時計くるつたまゝに鳴り
金を持つて行つたからする保護願
寄合におれがおれがの氣で揃ひ
雨垂れを蛙平氣な顔で受け
養生をせよが解雇の口實になり
世話さした上に割當寄附があり
片足をかけたが年寄乗せてやる
ラデオ屋はラデオがすむ店をしめ
看護婦はカードも見ずに呼んでくれ
妾宅は神信心の留守もあり
非常口平和の様にさびた鍵
戀をするよりか貯金をする女

東 同 大 同 神 同 松 同 松 同 大 同 大 同 鳥 同 愛 同 兵 同 大 同 堺 同
京 阪 戸 山 山 阪 阪 取 媛 庫 阪

雨 同 悟 同 市 同 文 同 玄 同 秋 同 雅 同 青 同 逢 同 無 同 青 同 太 同
月 空 公 芳 々 刀 幽 水 人 鬼 郎 路



番臺へよく眠い下女を置き
 茶の色を云へば朝寝の弱味もち
 救世軍克己週間なごゝ金
 若いうちだよ鳥も云ふ也
 カルモチン見せても女笑ふのみ
 晩の汽車ハブの唄なぞさわがしい
 入學が出来て隣嫌な仲
 興奮の友に女給は邪魔がられ
 支那奇術子供の腹の黒い事
 ゴンミでもボンミでも鳴れ春の鐘
 二階から一萬噸の船が見え
 煙りの底に青空を待つ
 春風さ来る肥の香を逃け
 まだ若い若いミ抑いつけられる
 呑み過ぎて歸れご妻は起きてゐる
 行けるまで使ふおひつの輪をたのみ
 入學へ兄の洋服丁度よし
 外國の雑誌もこつて遊んで居
 タ刊がまだ来ておらず雨になり
 嘘さいふ嘘はすつかり言ひ盡し
 職業にそむかれがちな日が續き
 もう二十才父より五寸長く着る
 嫁の世になつてから喰ふ瓦斯の飯
 受附のあれで役人氣取つて居
 飲むだけは己に似るな無理なこゝ
 はつきりミ素顔を見せて娘病み

同丸龜 同江 同鶴 同大 同神 同金 同金 同澤 同澤 同大 同神 同豊 同大 同大 同大 同山

同ゆづらん 同たけし 同普天 同狂雨 同重陽 同好次 同今雨 同山茶花 同九葉 同緑雨 同桂枝 同菊路 同暑岐



モダンが待てず卒業せず嫁かす
先ローバが眠りだした歌を洗はむ
連れて行くこでも云ふのか手を握り
暴君の様に自動車一文
霊柩車櫓荷物やうに積み
總入歯用なき髭にまだ手入れ
買物の手知らぬ女が悔みに來た
釣り上げた竿へ竿寄つて來る
腰掛の心算が首を恐れてる
父兄會級の子を持つ誇
青訓生はい私が進み出で
霧の朝ビルディング丈浮いて見
首巻へもう失業のアカが付
枯草をふみしめて出る龜の音

賢いな賢いなアで子は剃られ
静養もいゝが四十へ手の届き
其の邊は芽がある芽がある踏まぬ様
電柱の見える程ある枯野
寝轉んだまゝ童貞を尋ねられ
麥の秋五衛門風呂で話すぎなり
從卒の目に奥様の派手すぎ
成す成すぬ用ゐる人の誠のみ
買ひもせぬ品をこやか女客
信心も知らずに老いたよ夫婦
下ッ端は又雑用を言ひ付かり
赤玉はジャズミ光で客をよせ

大螢同大安鳥松同大鳥備奈 神同大神島大京大名泉嵯鳥島同大
阪ケ 阪東 阪縣取山 阪取中真 戸 阪戸根阪都阪屋州野取庫根 阪

雪運しひ花湖計卜一耕光蛇 さら吐美樂黒折銀草鯉潮佳鬼キ嘉明
かか 々 した句利山天 多逸ヨ 雄を坊劍人子草朗石友浪水樓シ月果



新時代の佗びに就て

住 田 亂 耽

芭蕉は或る池のほとりに佗びを提へた。いさもしのびやかな蛙の水の音ではあつたが、それは彼の胸底深く一つの大きな革命の爆弾になつてぐんぐん波紋をゑがいて行つた。それ以來彼の生活はその佗びの中に一切を忘却した。即ち彼がその門人を戒めて『俳談の外雑話すべからず云々』といつてゐるのは、少くも彼自身さういふ生活を欲し又實行したであらう事と思ふのである。

彼は佗びに對するMARTYRであつた。彼の一生は結局古池の餘韻を追ひながら佗びの探奇のみに終り、奥の細道に『予もいつれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます云々』といつて居るが、彼は夢遊病者の如く、佗びの誘惑に引きずられ、取る物手につかず、股引の破をつり笠の緒付けかへて幾度か江戸を後にし一生を旅人として終つた。

彼は佗びさういふことに就ては獻身的だつた。そして佗びに對する最初の犠牲者だつた。客觀的の價值判斷に於て彼は正風の祖であり、俳聖である。然

しその彼が、食物にも口やかましくつむじを曲けて居た彼が、いさも現實的な傳染病で、旅の空にあへなくなつたのは天も皮肉なジャツジを人間に與へるものである。

○ 成程芭蕉は佗びを見つけた。その功績は偉大である。然し彼の見つけた佗びは死んでゐた。波紋の小さい佗びであつた。(彼自身には大きい波紋であつたと言ふ事を寛容しても)

その小さい波紋の佗びに、爾後幾百年多くの俳人は隨喜の涙をこぼした。彼等の對照はいつも「古池や……」であり、それ以上の境地を開拓することが出来なかつた。即ち彼等は佗びを、或はあげつらひ、或は自己のうちに之を發見しやうと努めたが、結局芭蕉の佗びを把握する事を完全になしたものはなかつた。

佗びは芭蕉にとつて喜びであつたに違ひない。然し然し、彼はその佗びの爲に、幸福にも苦悶し續けたのである。そして「古池や……」の一句はこの苦悶を後世の俳人の腦裡に深く傳播さして行つた。即ち立派な一句ある爲に、多くの俳人は實は有難迷惑を感じさせられて居るのである。——と川柳家の僕の眼にうつつてゐる。

○ 一方、然らば川柳界に於ては如何であるかと言ふに、諸君も先

刻御承知の筈だが、芭蕉程は頭がよくなかつたせいか、柳翁は幸か不幸か川柳の『古池や……』と言ふ一句を後世にのこせられなかつた爲に後世の川柳家はいかにものび／＼と育つて来た。彼等は自由に奔放に、彼等の鋭敏な感覺を人生の種々相に觸れて社會を批判し自己を反省し、ひいてはその生活をエンジヨイして来た。

何んこいつても之は川柳家の大きな喜びであらねばならない。然し之は川柳と俳句との本質的な差から起る問題である事今更喋々を要しないが、前者は自由な約束のものに創作され（勿論穿ちがその基調ではあるが）後者は一つの桎梏の下に創作されなければならぬ必然性を持つからである。

文藝春秋の五月號に於て、川端康成氏は、文藝時評に於てマントの事を論じて居る中に『短い小説の極北は恐らく川柳であらう』（同雜誌「百頁参照」この言を吐かれてゐるが、少くも僕にまつては嬉しい語である。

さこの馬鹿だつて『短い小説の極北は恐らく俳句であらう』なんて言ひもしないし、又言つても認める阿呆はあるまい。

川柳にも短い小説の極北でないものも随分ある事は肯定出来るが新時代の呼吸を呼吸して居る川柳家は『短い小説の極北』たる川柳に心しすべき義務乃至自負を持たねばならない。小説には新時代の佗びがある。従つて現代の川柳もこの佗びをその内容の一部として行くべきであつて、俳句にはその内容のうちこれを盛る事が本質的に川柳程自由に深刻に出来るものではない。

いのである。だから俳句は（一般的ではあるが）今でも常に都會から逃避してゐる。

○

新時代の佗びと言ふ語に就いて、も一度私は佗びと言ふ事を論じたい。一茶の佗びと芭蕉の佗びとそこには非常な差がある。

一茶には佗びがないミ、芭蕉の盲目的ウォーシツパーが言ふかも知れぬ程、一茶と芭蕉とは違つた境地に生きてゐる。一茶が川柳家であるミ眞顔になつて呼ばれるのも宜なる哉であるが、その理由の一つとして彼の佗びが芭蕉のそれよりもやゝ波紋の大きいものであり、躍動性を持つてゐた事を舉げる事が出来る芭蕉と一茶との佗びが同じでないのは、そこに年代の差があり兩人の個性の差に起因する事は明かな事實である。一體佗びと言ふものは、それを味はふ人によつて違ふものであつて、芭蕉の佗びは決してさの人の佗びでもない。去來のそれ、其角の佗びでも決してなかつた。

この味ひ方によつて違ふ佗びに普遍的な概念を與へてしまつてゐる所に、現代一部の俳人の大いなる矛盾があるのだと思ふ。即ち彼等のプロダクツたる句に生命がないのであると信ずる。

○

最後に新時代の佗びについて論じやう。私が言ふ新時代の佗びとは、都會の騒音の中に、いさもさやかに溜息をついて居るであらう所のものをいふのでありたゞそれがかスカイスクレーバ

（四五頁へ續く）



月

評

(前號)

路郎

紋太

山雨樓

ひろし

近作柳樽 山雨樓提出

ほうかむりしたまゝとげをぬいてやり やなぎ

山雨樓……この句を出したのは、第一番に田園の素朴な情景がよく表はれて、素直な初々しい気分を感じられたからである。句全体を假名文字にしたるも、作者の用意が窺はれて面白いと思ふ。然し句から受ける感じは甘いものであるといふ事は、免れないやうで、コモンヒューマニティに墮してあるといふ事は、再考する餘地があるだらうと思ふ。ひろし……田園即景句で繪でいへば即興畫で本格的なものではないと思ふが、その意味に於て面白いのだと思ふ。

紋太……大休山雨樓氏の言はれる通りだと思ふ。どの點が甘いかと言ふと、矢張り叙法から来る感じで「ほうかむりしたまゝ」の「したまゝ」は冗漫な感じを起させる。

路郎……僕は土に親むである人の生活を面白く詠んであると思つてゐる。叙法の點から見ても、内容にふさわしく出来てゐて、そんなに非難すべき句では無い。只内容の持つ感じが、晩春のやうに茫とした所があるので、やゝ甘いと言ふ事が言へば言はれるのであらうと思ふ。

紋太……原句の感じは出ぬかも知れぬが「ほうかむり大きなとげをぬいてやり」さでも直した方がいゝかと思ふ。兎に角この儘だと「したまゝ」と言ふ説明が不要なものだと思ふ路郎……僕は不要な思はない。「ほうかむり」と「とげ」と言ふ事は確かにみつめてゐる譯であるが、紋太氏の言はれるやうに「大きなとげ」と訂正すれば、とげの印象がこの句の主要點になつて來て、句を充分に生かす事が出来たであらうと思ふ。之を數字で表はすと、此の句では「ほうかむり」に對する興味と、とげに對する興味とが五分五分であ

る。然し大きなとげとすれば、とげの方が七分も八分もの力強さを持つて來るので、ほうかむりは畫龍點睛と言つた形になる。さういふ點に於て句の叙法が如何に難いかと言ふ事が判る。

紋太……併し僕の直したのでは、田園趣味の感じがうすれて了つて、直した方がいゝとは僕も言へない。「したまゝ」といふ點が句に緩みを生じてあるといふ點に作者の再考を願ひたいと思ふ。

ひろし……この句が、のんびりとした表現によつて、田園ののどかな有様を謳うてゐるのだから原句のまゝで良いと思ふ。併しその面白きは先程言つたやうに、即興畫或ひは漫畫的である點を私は嫌らなく思ふ。

路郎……僕は漫畫的ではないと思ふ。どの點からさう言ふのかな。

山雨樓……叙法の言ひ足りない點に就いては、路郎紋太兩氏の御説の如くであるが、かうした些細な日常茶飯事に於ても詩は容易に發見出来るのであつて、殊更奇警に作り上げたたりする前に、かうした純な詩情に眼を向ける事が必要であると思ふ。併しこの句をもう一層いゝものにする爲には、もつと焦點的な觀察を求めたいと思ふし、又求め得たであらうと思はれる。つまり句主の感受性の深さによつて前のコモンヒューマニティから救ひ出す道があらうと思ふ。

路郎提出

派手におし派手におしよむご
たらし

雨月

ひろし提出 飯臺の脚がぐらつく睦じさ

二一 竹

ひろし……この句は月並の難はまぬがれまいが、二階借りでもしてゐる夫婦の、添うてからかなり経つが、子供も無く仲よく暮してゐる様が、よく出てゐると思ふ。

山雨樓……僕は子供が澤山あるんだと思ふ。「ぐらつく」といふ所に子供でなければならぬ活躍を示してゐる。

ひろし……僕はぐらつくと言ふのは、事實に於て飯臺がぐらつくと言ふのではなくその氣持をよんだものだらうと思ふ。睦じさといふ文字が何だか夫婦きりを思はすではないか。

山雨樓……この句はぐらつくが、生命だと思ふ……僕はぐらつくは、裕かでない生活を表はしたものと解するが……

紋太……両氏の性格が、見方の上に表はれてゐるやうに思つて、大變面白いと思ふ。併し恐らくは二人きりの世帯の句に、うけとる人が多數であらう。僕もその方をとる。そして叙法の上にやはり缺點が、存してゐる句だと思ふ。僕であつたら飯臺の脚がぐらつき睦じき」と言ふ意味に収めては、只だらうと言ひ下して睦じさと書みては、よむものが想像する餘地がないと思ふ。

路郎……紋太氏は却かうまい事を言はれてゐると思ふ。この句をじつと見詰めた場合と

路郎……之は私が嘗つて書いてゐた疊み句の例句に當る句であるが、その捉へ所の辛辣さに成功した句だと思ふ。前のやなぎ君が田園趣味の句を吐いてゐるのと、正反對に都會で苛まれてゆく人生をこの調子で解剖してゆく作者の手腕に敬服する。

ひろし……これは、この人の他の句（先月號記載）から見ても嫁き後の娘の事をいつたのであらう「むごたらし」といふ古句によく出て来る言葉が有効に使つたやうであるが、私にはその言葉がどうもしつくり來てゐない。路郎……それはこの句を嫁き後と解してゐるからであらうと思ふ。

ひろし……生活が苦しくて、派手な容裝が出来ないと言ふ風には僕は解し難い。

路郎……さうぢやないのだ。娘によつて生きやうとする親がよくある。その娘の境地を詠んだものである。でなければ「むごたらし」と言ふ言葉は適切でなく、娘の性格が許さぬ範圍に親の物質慾が出てゐるためにさういふ註文をするのである。

ひろし……さう聞けば、御尤もだと思ふ。

山雨樓……僕は「派手におし」の「おし」の字がかなり人情味を響かせてゐるので、直ちに以て親の物質慾までに考へ及ぶ事は、どうかと思ふ。寧ろこの場合は娘の容貌に就いて苦心する母親と對照してその娘の生れつきを表はした句ではないからうかと思ふ。併しさうした場合にとると、下五は餘り適切でないやうに思ふ。

紋太……僕は路郎氏と同じに實物の娘の意

味に採つたが、併し讀む人によつて、嫁き遅れの方にもとるであらう。嫁き遅れにまつた場合は母の愛さか娘の、いぢけた心持など、想像出来る、實物の女にとつた場合とは、割合に想像させる所が少いやうに思はれる。かうした意味が色々といれる場合に、普通ではその句に缺點があると言ふ事に、よく言はれるが、この句のやうに力強く、ぐんぐんといふみこなしてゐると、下五の「むごたらし」といふ批評的な言葉も左程眼につかずに、作者のしつかりとした態度におされて、とにかく佳句としてうけ入れる事が出来ると思ふ。

山雨樓……僕はもう一つ非難を加へたい。それは「よも」といふ二字で、下五の説明的な齣を更に理智的に傾かした嫌ひがあると思ふ。従つて前に言つた「おし」といふ母親の情のこもつた言葉に對して一層、つき難いやうに思はれる。

路郎……「おし」と言ふ言葉が、情がこもつて居るやうに解釋されてゐるけれども、私はこの言葉が特別にさういふ意味を持つてゐると思はない。先程「よも」と言ふ語に就いてと言はれたが「よも」でなく「おしよ」と「も」とに別つべき言葉である。「おし、おしよ」と繰り返して居る所に無理強ひがあるので、その點山雨樓氏は言葉の上に誤解があるのではないかと思ふ。何れにしても、無理解な言葉でなければ、この場合の「むごたらし」と言ふ下五の用ひ方が適切でない事になる。

さらりと讀み下した場合と、深く研究的に解剖した場合と三つの違つた解釋法が出来ると思ふ。そのうち一般の人がこの句を解釋するのは先づ夫婦二人ぎりの平凡な、然も平和なや、幸福な(勿論精神的にはあるが)境地をよんだものと解釋するであらう。も一つは「飯臺の脚がぐらつく」と言ふ事を生活の根柢がぐらついてゐる事に解して、僕の句の「登しさにだん／＼仲がよくなつて」式の境地に解する事も出来ると思ふ。勿論その句とこの句との人物は違つてゐる。第三の場合は子供のゐる事をこの「ぐらつく」と言ふ言葉から引張り出して來て、解釋する方法であらうと思ふ。何故かと言へば單に貧しい二人暮らしの生活を表現するにはぐらつくと言ふ言葉はやくきつすぎるやうに思はれる。その點から見て子供を彷彿させてゐるのではないかとそれにしては、暗いと言ふ言葉に動きが足りないやうに思はれる。かく三様に解釋出来ると言ふ事は、確かにこの句の叙法に缺點があるのである。尤も普通に解釋して丁へば、そんなに難しい句でなくなる事は、前述の通りである。

紋太提出

ついたちの嬉しき暗い夜具たゝみ

ゆすらん坊

紋太……この句は、叙法の拙い所が直ぐに目につく句ではあるが、よみ下して如何にもその嬉しさが如實に出てゐる事を感じさせら

れる。

ひろし……暗い夜具と言ふのは？

紋太……朝を思はせられる。

山雨樓……早起きですか、ついたちの丁稚等の……

路耶……僕は紋太氏の拙い叙法といふのに同感である。どういふ點にあるかといふのに「ついたちの嬉しき」で切れて「暗い夜具」で切れて「たゝみで切れる。即ち三つに感じがぶち切られるかと思ふと「ついたちの嬉しき」と「暗い夜具たゝみ」の二つに切つたものと見ると暗い夜具と言ふ叙法で、朝の早さを利かしたのはいふが「夜具たゝみ」の如き音律の連りは全体の調子をつかり打ち壊してゐると思ふ。この句が持つてゐる内容はよく判るし又嬉しさも出てゐるが、特に佳句としては推奨する程の句ではあるまい。

山雨樓……想は面白いと思ふ。朝まだきの暗がりのうちに満園をあげてゐる小僧さんの歡喜がよく表はれてゐて川柳的な着想といふ事が出来ると思ふ。ゆすらん坊氏は却々有名な腕達者な方で、常々敬服してゐるのであるがさうした氏にすら、着想負けをした感じがあるのは、短詩型の川柳に於て如何に用語の肝要である事を今更ながら感じさせられる。ひろし……僕は暗い夜具と言ふのは、何か精神的に深い意味のあるものかと思つて考へてゐた所が考へ負けてあつて、夜明けるの暗い夜具と言ふ意味だとすると「たゝみ」と言ふお休みの日の喜びを出す爲であれば「ついた

ちの嬉しき夜具のほのぐらし」と言ふ風に表現した方がより嬉しさが、出はしないかと思ふ。

路耶……僕は先程も言ふやうに、喜びを表はしてゐると言ふ事は、よく受けとれるが非常に歡喜してゐると言ふほどの強さに解釋してその内容がすぐれてゐるといふほごには感じる事が出来ない。といふのは古句の「藪入り」の句にかうした境地をもつと強く表はした句があると思ふからである。今その句を擧げる事の出来ぬのは遺憾であるが確かにその境地をよんだ句が相當あると言ふ事だけは、言ひ得られるのでこの句の内容にそれ程の新味を感じないのである。

川柳塔 山雨樓提出

水薬泡立つ春の淋しさに

鮎 美

山雨樓……所謂春愁——讀うらさき びしさがうかゞはれる「泡立つ」さいつたのも、可成り働いてゐると思ふ「淋しき」と切つた所も投げやりな氣分を表すのにふさわしい表現だらうと思ふ。

路耶……快い感じの句ではあるが、やゝセンチメンタリズムに、浸りすぎてゐるはしないか僕は「つけ豆の一粒づゝに浮き沈み」の句の感じをたまたまなく嬉しく思ふ。

ひろし……「水薬泡立つ春」……それ丈で春のなやましき、うらさきびしが充分出てゐると思ふ。この句は、その上に「淋しき」と持つて來てゐるので、淋しさを押賣りされてゐ

るやうな氣持になる。

紋太……さういふ事も確かに言へますね……「泡立つ」と「春」の切れ目がはつきりしない所も惜しいと思ふが、そんな穿鑿はせぬ事にする。すつぱりとした句上品な快い感じのある句として觀賞する事が出来る。「つけ豆」の句は佳句だと思ふ。

山雨樓……僕は句主のたとへそれが感傷的にしても偽らない心持を表はした事を、尊く思つたので、後の「つけ豆」の句にすれば、そこに理智の閃めきが先づ頭を奪ふので、寧ろこの句を提出した譯であるが、我々の日常に於ける生活感情を偽りなく表す爲には川柳にしやうと思ふ。先入主から離れる事も必要だらうと思ふ。只焦點的な或る物を掴めば、それが自づと川柳につながる。來るのであらうと思ふ。頭から川柳を作るんだと言ふ氣持で、直ぐに物事を拵へ初めると言ふ事が、句達者であつても、遂にその人の本當のものを一生よう残さないと言ふ結果を、危むもので、詩の尊さを顧るならば、自分の本當の心持、自分の感じた詩の表現に邁進せねばならぬと思ふ。

紋太……「つけ豆」の句には、そんなに露骨に理智が出てゐない。私は感じる。確かに「ばうふらの蚊になるまでの浮き沈み」と言ふ似た句があつたと思ふが、それよりもこの句の方が、すつと真いと思ふ。

ひろし……「つけ豆の一粒づゝ」の一粒づゝが、理智的だと言はれるのであらうが、この

程度なら所謂川柳的な見方として許さるべきではないか。

山雨樓……つけ加へるが「つけ豆」の句はある思想的背景を持つた事は僕も受取つて居るので、可成り面白い句だと思ふが川柳に叙情味を盛つた「水薬」の句にもより捨て難いものを認める譯です。

路郎……僕は「つけ豆」の句を單なる感じの句として見てゐるので、その點から言ふと水薬の泡立つのさ、ちつとも變らないと思つてゐる。只捉へたものが「つけ豆」と「水薬の泡立ち」の相違で水薬の泡立ちに春の淋しさを感じるの、多くの人達の普通に感じる事であらうと思ふが、つけ豆の一粒づゝに對して、ちつと眺め入つて居る作者の氣持は誰かが感ずる程度の淺いものではないと思ふ。そこに作者の個性が出て來て、句の特異性を見せて居るので、非常に興味を深くしたのである。言換れば作者の發見の面白さに我々を引きずつて行つた晩前を敬服してゐるのである。

紋太……題詠では、薬瓶の泡立ちを取扱つた句は、始終見る所であるが、この句のやうに濁りのない態度で句にされた場合は、見つけ所の平凡であるなしに關らず、生命のある句だと言ふ事が出来ると思ふ。

路郎……僕は「つけ豆」の句に余り肩を入れすぎた爲にこの句を罵倒してでも居るやうに思はれるかも知れぬが、この句もさう拙

い句ではない……と思つてゐる。

路郎提出

何處へ行く大阪驛の人人人

琴 人

路郎……都會生活の中に居るさ、自分を見失ふ事が多い。偶々作者が大阪驛の如き雜然とした多くの人々を目の前に見た時に、その人達の事よりも、そこにしょんぼりと立つて居る自分といふものをはつきり見せられたのであらうと思ふ。何等そこには淋しさ、悲しさ、嬉しさと言ふやうなものを訴へては居ないけれども、第三者はその作者が人生に對する一種の寂寥さを同感し得ると思ふ。

ひろし……「人人人」と人を三つ重れた表現も却々うまいと思ふが、他の人が之を無暗に使はれる事は危険だと思ふ。

山雨樓……この句を見入つた感じは、成程路郎氏の言はれたやうな境地も受取れて面白くと思ふが、どちらかと言へば、平凡な觀察をその儘句にしたやうな所があつて、遂に見逃され易い難があると思ふ。作者に冥想的な背景が有つて作られた句とすれば、その無技巧さが、意味のトリックに價してゐるのではなからうかと思ふ。

紋太……平凡な觀察を句にした——成程僕もさう思ふ。驛の雜沓や汽車の中の混雜等に

あつた事で、又僕のみならず常に出つけない老人や女の口からよく聞かされる感想であつて、それを十七字にうまく纏めてあると言ふだけではないかと思ふ。もつとさういふ場合に出合つて、僕等の感じるものは、この句の上に表れたより以上のものがある。それがこの句に出てゐないと思ふ。その感じを句にする事は、却々難しく、まだしも之に纏められた事の巧みさを認めはするが、もつと深く何んとか言つて欲しいやうな物足りない感じがする。もつと繰り返して、想を練られて、この想を活かして貰ひたいと思ふ。路郎……僕は之で出てあると思ふ。文字通りには解釋すれば、それまでであるが「たこへば、啄木の歌に——何んとなく汽車に乗りたく思ひこのみ汽車を下りしに行く所なし」と言ふのが、それがそれ等でも文字通りに解釋すれば、眞に變哲もない歌であるけれども、作者が人生の淋しさをさうした單なる出来事の中に發見すると言ふ所に詩があるのではなからうかと思ふ。この句等は、作者の哲學的な句として、充分味ひ得られると思つてゐる。

ひるし……句評といふ事が、一つの創作であるといふ見地から言ふなれば、路郎先生の評は先生の創作であつて、作者の内面にまで路郎先生が及んでゐられるやうな氣がする。果して作者はそんなに深く考へたか、さうかと思ふ。併しその場合、句は先生の評の如く解して初めて價值があると思ふ。して見ると選者の真否と選者を違ふといふ事が、非常に重大な事だと言ふ事に思ひ及ぶ。

路郎……勿論句評が評者の創作であると言ふ事は言へるが評者は何處迄もその作者の

句の表現の方法を分析して批評すべきものであつて、只感じのみ上からの批評する時は誤評に陥る率が多くはなからうかと思ふ。

川柳書架

(四)

(最上、初二、三)

アリンズ國辭彙

別名

吉原詠言集 色まの五丁町にいてふナマリ
傾城嬌舌篇 花魁のはてなマメクさくぜつ也
樂境艶詞錄 面白く里でからふつやことば
惡所色音考 亡ハのさでめかしたるれ論
北狄蠻語箋 北狄の蠻語はアリンズとの句也

再生 外骨 編

◇「アリンズ國辭彙」を題して往年「赤」雜誌及「一癖隨筆」に略記された事もありましたが、それは二三頁に過ぎなかつたのを今四百頁以上の大冊に増修されたものです。要は寶曆より天保までの八十年間江戸市人の歡樂境であつた吉原をアリンズ國と呼んだので、其アリンズ國語の成立、起原、傳播、變化、廢滅等を詳説し次に二百七十餘句の古川柳に一々評釋を加へ、附録には吉原女郎梅宿女郎の事を添へ、軟語摘録として端唄、狂歌、落語、小説文句等を並べ、最後に松川弘太郎氏の「座語考」三題する文法上より見た軟語研究の一篇を録し、裝幀も亦從來にない優美典雅を極めたものであります。發行所は、東京市本郷區龍岡町十五番地

半狂堂、三色版口繪二面、寫真版口繪四面、艶姿嬌態の錦繪十二枚、凸版挿繪六十餘個、和裝本 全一冊 定價二圓五十錢、(定價一圓引で二圓外に書留小包料廿錢)◇外骨氏の獨壇上で、珍本蒐集家にまつても、古川柳研究家にまつても一本を机上に備へられたし。

新川柳大觀

川上三太郎 編

◇その跋文「應の目より」此の句集編纂の目的は新川柳即ち明治中期に於て更生したる川柳が、昭和の今日まで歩み來つたその道程を作品の上から鳥瞰しやうとしたところにある。尙且つ併せて明治時代の風俗、大正時代の世態、昭和現在の風潮を川柳さいふレンズで覗いて居るころにある。かるが故に本書を手にした人が本書に依つて新川柳の過去の足跡を知るに共に、川柳に依つて明治、大正、昭和の三時代三様の風俗、世態、風潮を推知し得れば編者の本懐これに過ぎたるはない。(以下略)

◇巻頭には序文に代へて「川柳す劇四つ」が掲げられてゐる。これは編者の頭の鋭角さを示したもので、すこぶる氣の利いた序文といふべきである。

◇昭和四年四月二十五日發行、四六横綴三七六頁、定價一圓五十錢、發行所は東京市淺草區新旅籠町二十番地草文社。

◇頗る氣持のいい句集である。目次も實にたんねんに分類してある。川柳家の机上に一本を薦む。



椿の庭から

蛭子省 二

五月一日(メーデー)三越の争議も行動が下卑できたのは、弱者の悲哀だ、然し某紙に

三越店員虚榮の増給運動し

の川柳の通り云々、論じてゐたのをみては、遂に弱者がサイナマれるのに同情さ昂奮を覚ゆる、それに『運動し』なごが、今更川柳として一般的に通用するのも、サビしい事である。

神社の太鼓をききつつ、朝湯につかる、實から成長した椿がヤツト花をみせた。六ツ咲いた。

み佛への椿重なり母がみゆ 省 二

『川柳雑誌』つく。

椿は赤い破れ障子からの庭 省 二
新緑の表紙繪、アノ清透なウルホヒのある縁は朝鮮にない、内地の同志多き地の吟行は欣羨に堪わぬ。

五月號は賑やかな編輯だ、諸家の句を丁寧に味喃する、随分研究問題がある。前途の拙稿が盡きたら筆を採つてみよう。私の『古句雑考』は大阪MT生氏の質疑なので、七八ヶ月前に届けたもの、猶は残つてゐる。筆者も聊かモノ珍らしい氣抜け氣味でよむでみた。今後『古句雑吟』もあるのも續きであるからそのおつもりで盡さない所は御諒承を願ひ度い。今日は斷片的なものを綴つてみよう。

○

天長節の夕、配達された郵便物中に、『奈良文化』十六號に『彗星』四月號があつた。前者には中平文學士が『萬葉集と川柳』を、後者には遠藤前川氏が『川柳かねの蔓』を載せて居る、無論古川柳の研究で、斯く學者連中の蘊蓄を聞かれるは

川柳詩徒たる私には感謝に充さるゝのみである。

萬葉ミ川柳ミは先づ以て縁のうすかつたものミ斷定する方が
アブナゲがないと思ふ、『學者ではない江戸人が、この程度に
萬葉集の歌なり、作者なりに就て知つてゐたか』の書出しで
『要するに斯ういつた風で、江戸の民衆は未だ萬葉集に對して
は大した常識を具へてゐなかつた、けれども流石は奈良時代の
一大文學結集であるだけ、相當の關心を有たれてゐたことは明
かである、以上約八人、十首、五十句の羅列を唯これ丈の結
論を出す爲めの例證には十分であらう』してある。

茲に餘事ではあるが、國語漢文事政學者の古句檢討に必ず附
隨する觀念は、古川柳家が無學であつたといふ事である、例へ
ば源氏物語を種ミせずに論曲に因り、萬葉直接に材をこらす百
人一首を料ミした事は確かに認められる、が無學ミは事攻の謂
でなければよし、所謂無學のそれであるならば、川柳成立の主
張時代の思潮を度外視したもので、恐らく民間學者民間識者の
参加を信するミ俱に、そういう學問的の機鋒を現はさなかつた
處に、通俗的な萬斛の妙趣生命が盡きないものである。今日古句
の註脚理解をしようミすれば僅少な學問では到底なし得られな
い。衆智を集めて論議の餘地が存するのであるから、古川柳家
を無學ミいふ前に、古川柳の學問的價值に頭を下け度いのであ
る。私は一日ミして古句を觀ない日はないが、殆んど難解ミし

て殘して居る。自らの無學を餘りによく知つて居る。だから川
柳家中古句に振り向かない人々は、他の學者から一層無學に見
做されはせぬか。尤も川柳は詩であつて學問そのものではな
らうが、古句は知らぬでは川柳専門大家ミして、世間が許さぬ
程システマチックな時代になつて居る、お互に『無學』ミい
れて祖先を恥しめてはならぬ精進もいる。

萬川氏の文は未だ熟讀してゐない。が學者にも千慮の一失、
一二眼に留まつたものもある。いづれ同志の何人かが、同誌上
論ぜられるだらうから、私は多くは書かぬ。

文錢を妾そばからひつたり

〔説明〕煙管にても作らうミて妾が慾ばつてかき集めたり
いかに妾が卑しいミいつても、文錢をヒツタくるでは句の上の
活動をなさぬ、文錢は文選であらう。

細見を四書文選の間に讀み

でわかる、文錢(ブンセン)、文選(モンゼン)

引窓へついても錢は廻りもの

〔説明〕臺所の引き窓の綱の錘り代りの錢、それでも錢は錢
なり

狂句なのだから、此の説明では下五が更に利かなくてはなからう
か、

引窓の車もはづす火の車
で初めて、廻りものがわかる。

引窓の車にこまる陸奥の國
四角錢では廻りがよくない筈なる。

錢箱へからくくく五十いれ

(説明) 漏斗付の大けさな木箱の錢箱へたつた五十文からくく

の音貧乏神がきいて呆れよう

この説明、私には血が通はなくてわかり兼ねる。ナゼ五十さいつたか、ココが主眼であるをすれば、五十難關係と思ふが如何でありましよう。

十さしを禿おきるこ出して見る

(説明) 僅か十文ばかりの錢さしを二人がさも大事さうにち

よいく出してみる一場面の轉換

十さしはホウヅキの事、『十さしを貰つて禿蚊が苦勞』云ふ有名な句がある、まだ陳べてみたいけれど次回。

○

四月號拙稿『播磨風草』中の搗染をツキヅメのお證になつた
お方がある。カチ染である。例へばカチ栗なごの如し、カチン
の水干なごいって、カチは假借字褐色の事、藍を搗ちて染む
る意、武器をそめたから勝色でもある。夫木集『秋くれはしか
まの市にはすかちの深き色なる風のおこかな』。播磨飾磨郡
印南の名産、播州名所巡覽圖繪に、當津細江町に紺屋多くして
其の中には古代より相續の者も有るべけれど、染法今精しく傳

へたる家なし、按ずるに只いく度も藍に染て白にて搗きてただ
濃く染めたる成るべし、白にて搗くをカツミいふ。餅を搗飯へ
かちん、ミ云ふにても知るべし、濃き藍染のこミ歌にてしるべ
し。

東海道名所記の京清水の條にも、樓門の内左に、しかま塚あり
昔田村鷹獵して此山に入たまひ、延領沙門に逢いて、そのかり
得たる鹿をうづみし所也。しかまのかち地いへるは播州の
しかま津には、褐の布を染て、いだしける事をついでよく爰に
引きたりミ聞ゆ。

○

因に

姫の氣に合はず高尾は所替

●姫は姫路城の妖怪いふこになつて居る、彦左衛門功蹟之記
上卷に播州姫路城老女狐の事の條がある、序だから添て置く
一名尾引の城ミ稱するは、千歳を経た狐尾にて繩張をしたから
で、白狐が守護なりミ傳へられる。

狐が徒然に出てきては書院番の人々昔咄をする、壯者共が
蜜柑を握つて、之をこり得るや言ふに、狐が確かにこり申す
ミ答ふ其時手を開いて見れば、モウ蜜柑はない、異口同音に不
思議がつて居る處へ、彦左衛門が打笑ひ乍ら、各は粗忽者ぢ
や、狐千年を経たりこも元來畜生ならずや、人間の握り居るも

は講談をゆるがせにし得ない。

○

知人から温泉便りが頻りにくる。温泉關係の著書も出るころから考へれば、流行氣味もあらうが羨ましい。私は四五ヶ所の温泉より知らぬ。本誌の諸氏も別府等に逆ばれ、京都祇園にされてゐる。別府で思出した事は、高崎山で大友島津の合戦に、大友軍水道を絶たれ、山から糧米を流して水の豊富なるを敵に示した傳説があるに聞いた、これは楠軍にもある。古句に楠が敵を酔はせた、米の水馬盟の米で寄手をはかるなり馬を米で洗つて、水に溺せぬデモンストレーションの謀計であつた。

○

馬盟の花は轡でしやんごさめ馬盟は申すまでもなく、馬を洗ふの具、小田原陣に秀吉が、花器がなかつた爲め、當意即妙、馬盟に燕子花二株を活けさせ、轡で留めた、元來足利義政が戯れの考案であるとも云ふ。馬盟に轡はつきものの様になつて居る、床の間に飾らぬのも、馬盟の性質上然るべきであらう。

○

のがさうして探られようか、そこで彦左が蜜柑を握り、三つてみよと言ふに、狐はこれぬき答ふ、そは壯者共は狐の手を握つて居るからで、彦左は然らず、イザさいふ時手の甲より小柄を刺し通さむ意中であつたのを、狐が知つたからであつた、彦左、門功績は、川柳家は一度は目を通しておいでよい。此書の最終には、牛の罫丸三ツの話がある、時代川柳大觀にも金玉がほしいさうけぬ御墨附大久保も辯和も玉で名が高し彦左衛門打笑ひ、明日死する找なれば、御朱印よりも外に望む品あれき、これは叶ふべからずと思へば申出すに及ばず云へば、佐渡守是をきき、何事にもあれ御邊の望有らんに將軍叶へ給はで有るべきか、然らば早々御歸りあつて將軍へ領地の御朱印より、牛のキン玉三ツ懇望候言上し給へ申すにぞ、佐渡守驕かぬ體にて莞爾笑ひ、彦左衛門殿末期に珍らしき望事を申さるゝもの哉、品に依りて調へ遣はされ間敷にも非ず、御邊を何んにし給ふや尋ねしかば、彦左衛門は牛の罫丸三ツ有らば、一ツは減多に知行遣らうと有る將に進ませたし、一ツは減多に知行を懇望する若殿原に喰せ度し、今一ツは上使に立ち取次せらるゝ其許に喰はせんと思ふのみ、是より外に望みなし御思案有て調へ給ひ云捨て、ころり打伏し再び問答に及ばざれば、さしもの牧野も赤面の體であつた。

古川柳家は大家ものをあまさず、ネラつてゐたのだから、吾

本誌二月號某氏選の中に
里歸り子守も矢張りよい着物

が振^ふりて居る。又大阪の某^{ある}誌^し四月^{しがつ}號^{ごう}には、

子を先^{まづ}きに歩^{ある}かせててくる里^{さと}歸^{かへ}り

が載^のせられてある。『あけほの』誌^しの私^{わたし}の選^{せん}評^{ひやう}の際^{とき}にも同^{どう}種^{しゆ}のものがあつて、一寸^{いちゆん}一言^{いちごん}したが、私^{わたし}見^{けん}が誤^ごつて居るかも知^しれぬから、申^{まを}出てみよう。

『里^{さと}へ歸^{かへ}る』と『里^{さと}歸^{かへ}り』(名^{めい}詞^じ)とは、等^{ひとし}しいものではな

い。里^{さと}歸^{かへ}りは結^{けつ}婚^{こん}後^ご三日^{さんじつ}或^{ある}は五^ご日^{じつ}に、己^{おの}が家^かに歸^{かへ}る一^{いつ}ツの儀^ぎ式^{しき}なのだ。歸^{かへ}るを忌^いみ、里^{さと}開^{ひら}きとも言^いふ。むつかしくいへば歸^{かへ}寧^{ねい}である。だから里^{さと}歸^{かへ}りに子^こ供^ごや子^こ守^しを連^つれるようでは、餘^{あま}り手^て

取^と早^{はや}やすぎる。近^{きん}代^{だい}世^{せい}事^じ談^{だん}に『婚^{こん}姻^{いん}の三^{さん}日^{じつ}に至^{いた}りて新^{しん}婦^ふ父^ふ母^ぼの

家^かに歸^{かへ}る、此^{この}禮^{れい}唐^{たう}にもあり。五^ご雜^ざ俎^そに云^いふ、漢^{かん}以^い來^{らい}の禮^{れい}は二^に月^{げつ}に男^{なん}女^{にょ}會^{かい}し、婚^{こん}姻^{いん}をさだめ五^ご月^{げつ}五^ご日^{じつ}に親^{おや}の家^かにかへりて父^ふ母^ぼに逢^あ

ふ、是^{こゝ}を歸^{かへ}寧^{ねい}といふ、大^{たい}明^{めい}の禮^{れい}は三^{さん}日^{じつ}の後^ご女^{にょ}婦^ふ同^{どう}道^{どう}にて父^ふ母^ぼの

所^{しよ}へ行^ゆを回^わ鸞^{わん}と云^いふ、此^{この}禮^{れい}を以^{もつ}て日^に本^{ほん}にもなす事^{こと}ならん。いづの世^よにはしまるさいふをしらず、で、ほんさうの理^り由^{ゆう}は不^ふ明^{めい}なの

である。理^り齊^{せい}隨^{ずい}筆^{へつ}には、『歸^{かへ}寧^{ねい}は里^{さと}かへりなり、回^わ鸞^{わん}は婚^{こん}入^{にゅう}な

り、五^ご雜^ざ俎^そに見^{けん}へたり、今^{いま}の人^{ひと}三^{さん}日^{じつ}の後^ご、女^{にょ}婦^ふ婚^{こん}省^{しやう}父^ふ母^ぼ、謂^い之^を。回^わ鸞^{わん}、閩^{いん}人^{にん}謂^い之^を轉^{てん}馬^ま、蓋^い春^{しゅん}秋^{しゅう}時^{とき}有^あ回^わ馬^ま之^の義^ぎ』。

里^{さと}歸^{かへ}り嫁^{よめ}のくさめの始^{はじ}めなり

里^{さと}歸^{かへ}り大^{だい}びいきにもうはなし

里^{さと}歸^{かへ}り隣^{りん}に逢^あはぬは不^ふ首^す尾^びなり

里^{さと}開^{ひら}き此^{この}頃^{ころ}にない飯^{いひ}をくひ

我家^{わがや}の客^{きやく}枕^{まくら}でくふ里^{さと}開^{ひら}き

等^{どう}古^こ句^くは澤^{たく}山^{さん}ある、よし關^{かん}西^{さい}方^{ほう}面^{めん}なで、子^こ供^ごが來^きてから里^{さと}へ歸^{かへ}るのを、サトガヘリと云^いふ人^{ひと}があつたさしたまて、それは正^{ただ}しくない事^{こと}丈^{だけ}はわかる。

○

私^{わたし}がネギの微^み塵^{じん}に刻^{きつ}むだのが好^すきだま『京^{けい}』誌^し(二七號^{ごう})にかいた頃^{ころ}であつたらうか、本^{ほん}誌^しに八^{はち}翠^{すい}坊^{ぼう}さんが、嫌^{きら}ひなものは葦^わ・女^{にょ}房^{ぼう}でもこれを受^うつたら離^{はな}縁^{えん}するこになつてゐます、生^{せい}の葱^{そう}と舉^あげられてあつた。

あれネギをたべさんすよと大^{だい}そうな

臭^{くさ}氣^きが鼻^{はな}を衝^つくのであらう。食物^{じき}には好^すき嫌^{きら}ひがあるから、食^く道^{どう}樂^{らく}の主^{しゅ}張^{ちやう}も起^{おこ}つて互^{たがひ}に譲^{やう}らぬ處^{ところ}に興^{きやう}趣^{しゆ}がわく、私^{わたし}の如^{ごと}く何^{なん}んでも頂^{ちやう}くのでは喧^{けん}嘩^か相^{さう}手^てにもして貰^{もら}へぬ。臭^{くさ}みを簡^{かん}單^{たん}に除^{はら}くには、後^{あと}で砂^さ糖^{とう}を嘗^かめて置^おくこよい。

續^{つづ}一^{いつ}休^{きゅう}咄^{だつ}四^しの卷^{まき}に、一^{いつ}休^{きゅう}の庵^{あん}へ來^き候^{こう}、常^{つね}に教^{しやく}をうけし僧^{そう}あり或^{ある}時^{とき}久^くしく打^{うち}絶^{だつ}ぬ來^きらざるをいふ不^ふ審^{しん}に思^{おも}ひ給^{たま}ひ、しれる人^{ひと}に尋^{たず}ね給^{たま}へば、その人^{ひと}のいひけるに、誠^{まこと}に此^{この}僧^{そう}いかさま十日^{じふにち}餘^{あまり}にも

なるらん、傷^{きず}風^{ふう}の病^{びやう}發^{はつ}り以^{もつ}ての外^{ほか}のくるしむ、脈^{みやく}もあしく命^{いのち}も

危^{あや}く見^{けん}候^{こう}、ある醫^い師^しの此^{この}病^{びやう}にはネギを服^{くわく}せばよろしからんこ申^{まを}

せども、此^{この}僧^{そう}五^ご辛^{しん}をば深^{ふか}く思^{おも}ひて用^{もち}ひられず候^{こう}と語^{かた}りければ、

一^{いつ}休^{きゅう}はれを聞^きき給^{たま}ふさひさしくネギをば買^{かひ}はせ人^{ひと}に持^もたせ病^{びやう}僧^{そう}

の方^{はう}へ詩^しをそへてやり給^{たま}ふ。

病^{びやう}僧^{そう}大^{だい}苦^く發^{はつ}傷^{きず}風^{ふう} 死^し脈^{みやく}頻^{ひん}々^{たんたん}命^{いのち}欲^{よく}終^{しゆう}

如^{ごと}來^き新^{しん}病^{びやう}川^{せん}牛^{ぎゅう}乳^{にゅう} 莫^{もく}忌^ぎ丸^{がん}身^{しん}承^{じやう}艸^{そう}葱^{そう}

これによればネギが回生の藥なる。

私は親孝行をなし得ない。セメテ古人の型丈けでも心得て置こうと、ネギ食ひもその一策なのだ。陸續傳をよむと、續が獄中なりし時食をみて悲泣やまず、使者怪しむ尋ねれば、母來りませご逢ふを得ずといふ、使者は門卒が續に傳へたのであらうと大に怒る。續曰く、然らず、餉羹を食するにより之を知る、母は「斷葱以寸爲度」で、寸を以て定められたから、今食中のネギをみて識つたのであると、私は日々母の調理の恩恵を蒙りつつ、近年澤庵が充分に切り放たれて居ぬものがある、皮まで庖刀が届かぬ力の衰わから、母の老をしみ／＼感ずる。葱の寸は多くの教訓だと思つて居る。

○ 大昔、葱は儀式に必ずつきものであつた、東瀛子にも、「元來種子五辛を禁、餘臭うつり葱をまさなきもの」の様に思へり、これ本朝の古風に反す、葱の用ひらるゝ事多し、光親王宣下の時、參内の前葱の白根を喫み碎き、四方に息を吹て參内し給ふ古實ありとぞ、本草綱目に李時珍の曰、五辛菜は元旦立春に葱、蒜、薤、蒿、芥、辛嫩の菜を雜和してこれを喰ふ、迎新の義をされりと云、でその例は甚だ多い、(年々隨筆にも出て居る)

葱(サウ)は訓をキミといふ、一文字と稱す、ひこもじの北人枯臥古葉かな、根をおろして白根多く、根深の名がある、

蕪村

根深ひく麥の早苗やあやめ草 其角
下野州の梅澤、濃州の宮代の葱白、其の白きころ尺近し、(和漢三才圖會)

附木匠足利葱のそり加減 武六
白い所は葱のふも股

春夏を刈葱云ひ秋冬を根深といへり、春夏は陽氣の時分なれば性氣葉に上る故、淺く裁べし、……秋冬は地中陽氣なれば根に味を持つ夫れ故ねぶかこも稱するか(農業餘話) 柔嫩を分けたるを分葱云ふ。

葱ばかり食ふも一ミ足ちがひなり
骸骨を買つて伊勢屋は葱を入れ
齒のわるさ葱ばかりを食つてゐる

雞炊は菲に限つたもの、フタモジ云ふは、一に非らず三文字をわけたのである。

いけざるこにら雞炊のしたくなり (十一ペン)
物類稱呼に、胡葱は葱の意、根深に對したる名なるべし、つは助字なり、古句にはアサツキを詠むだものが驚くほさある。

あさつきは愛想づかしの鱈なり
あさつきをよしてなり喰たがり

胡葱にしほれた顔の根がしれる
胡葱は結ばれる草 別れ草
胡葱にこしも解かぬ帶締めて
胡葱を酢味噌の中へ植て行
胡葱の手のない中へ電拂

朝鮮支那ではニンクを最も悦び喰ふが、此臭氣には流石の私もヘキエキする。(五月一日稿)

漫川柳 假姿 (六)

柴路

舟郎

畫評

こみ入った話シャンく湯
が沸きる

草 明

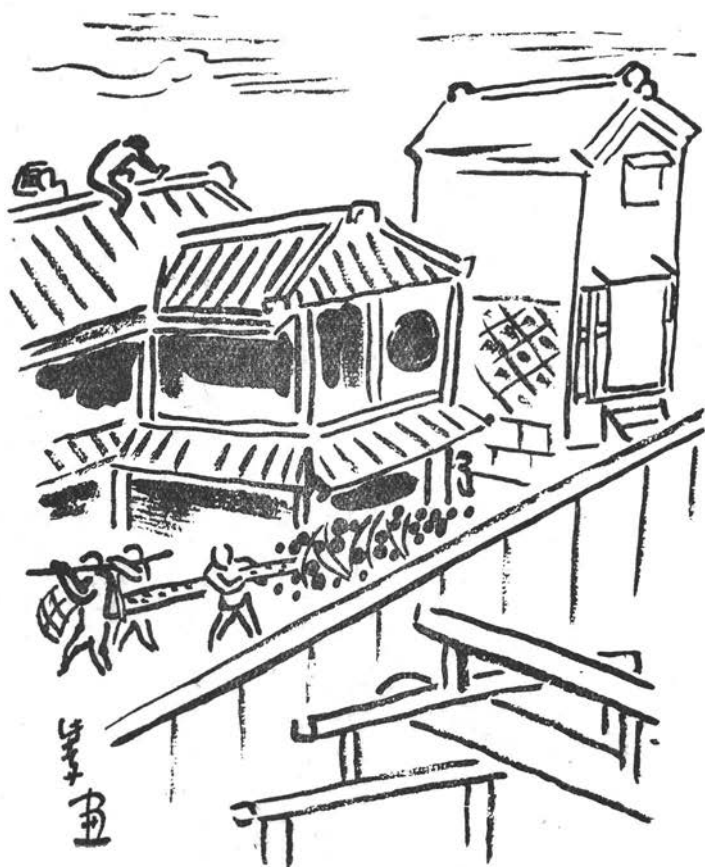
『でも、おつ母さん』こ云へば
『それでは、お前不足なのかわい
い、談はそれよりいよゝますく
こみ入るご見わたり。湯のたぎる音
のみ高し。』



類焼へ濟まないやうな家
を建て

源
坊

不可抗力云へば不可抗力なり
されど火元が、いの一^{はん}番に再^{さい}樂^{らく}し
しかも堂々^{どうく}として焼^や太^{たい}りの觀^{かん}ある
は心憎^{こころにく}つき振舞^{ふるま}ひならずや。
傍^{そば}杖^{たんせいき}の嘆^{なげ}聲^{こゑ}消^きゆへくも無^なけん。



男さへ生めばよろこぶ日本人

蒼 梧 樓

男の子を生めくも不可能なる要求
をなすも日本人なれば、たま／＼男の
子を生まんか、早やくも初節句の鯉の
ほりまで求め来るも日本人なるべし。
歡びのころ天井を突き戻る。

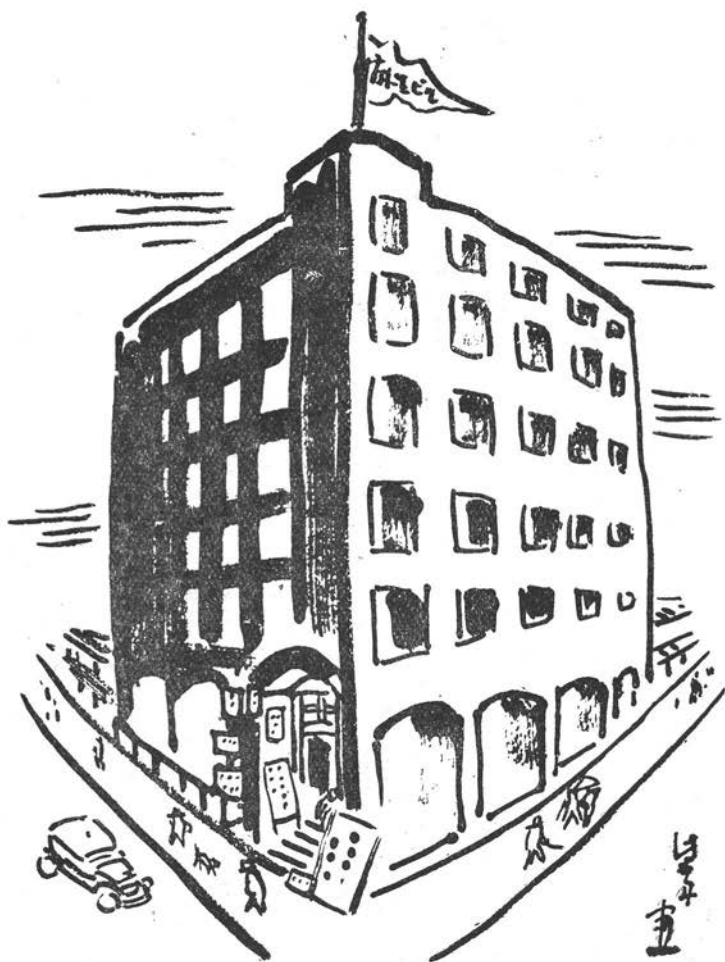


日五五

ビルディング標札
屋ほど掛けてゐる

双葉子

ビルにもブルビルあり
プロビルあり。プロビル
たるや、大小の標札散を
亂して掲げられ、老體一
面に膏藥貼りたるにも似
て見苦しきこと限なし。
標札屋の標札と見たる蓋
し作者の滑稽眼のみ。





川柳水無月祓

藤里好古

人類生活の濁穢を祓ひ除かぬために、
上は朝廷より下山村僻邑の神社に到る迄
十二月と六月の兩度に大祓の祭儀が行は
れる。十二月晦日に行はるゝを「師走の
祓」と云ひ、六月晦日に行はるゝを「水
無月祓」とも又「夏越祓」とも云ふ。

一年の中を流れる御祓川(柳樽三六)
の句は夏越の祓の當日が即ち一歳三百六
十五日の最中たる事を詠んだのである。
萬一六月に閏月あらば果して何れに行は
れんやと云ふに、「日本歳時記」には「
東鑑」の文を引ひて、後の六月晦日を以
て行はれし由記載あり。「八雲御抄」に
は六月祓は邪神をはらへなごむる故にな
ごしと云ふと云へるも、「和訓栞」は、神
をなごむる故になごしと云へば、六月に

かざるべからず、十二月のもなごしとい
ふて然るべし、然るに六月にのみなごし
と云ふは、夏越の義なるべしと説けり。
されば水無月夏越の祓は、炎威熾烈、濕
熱の高きよく秋冷の候に轉する季節に際
し、疫魔なからしめんを祈請するを本義
として十二月祓が濁穢を祓除くを本義
とするを聊か異なる處があるのである。
茅の輪が来るを御所さわざし武玉川九
「友俊記」六月晦日の條に、暮がたに
なごし也と書き起して、くれつかた山科
家より御藏小舎人の手によつて、茅の輪
が宮中へ運び込まれて来る、然して主上
をはじめ女中達迄、大庭(あさひ)をも
ちて三度びくやりたまふ由の記載あり、
更に「御湯殿の上の日記」「二水記」

禁裏番衆所日記」等によれば、宮中なご
しの茅輪作法は「御湯殿の前縁」又は「
台盤所」に於て行はれたるがごし。

此夏越の祓に(堂上も)茅輪をくぐるは
「友俊記」に依れば
みなづきの名ごしのはらへする人は
ちこそいのちのぶきこそきけ

の呪歌を三度び唱へ、右の手に麻の葉を
長さ一尺ばかりに二三本紙にて包み持ち
て、左の足より入り、右の足より出る、
以上を三度行ふ定めなりしむ。俗間にて
も水無月祓の茅輪の行法は嚴重なる作法
であつた。「日次紀事」六月晦日の項、
上賀茂神社の條に

今夜上賀茂神社有音楽則修祓

地下人各脱出茅輪又以枯麻條作木偶

人嶺之河水

とあり、諸社の社頭に於ても此夜茅輪を諸人にくゞらせしものであつた。

尼介の茅の輪を抜ひ口を聞く(武玉川九)茅の輪を越すさうごく唇(武玉川十三)一家中御意の茅の輪を潜る也(武玉川七)茅の輪を抜ける不拍子な顔(武玉川三)等は是等の實感を描寫したるものである同じく『日次紀事』下賀茂社の項に今夜四戌刻下鴨社司出河邊而修祓

とあり。戌の刻(午後八時)下鴨社の神人紅川に立てた五十串の前に坐して井上社に神供し音楽がある。『八雲御抄』にも河邊に五十串を立て麻の葉なごにてするなり、夕又は夜する事なりとある古儀にして嚴肅なる神事なり。然して神人大祓の神詞を讀奏し、祓を修了つて本社社に詣つ。

河風を串にさし、ばや御祓川(武玉川三)の句は此五十串の古を詠んだもので、俚俗は五十串を取れば福があるにて、多數の人々が祀りが終るや否や川に飛び入つて争ひ取るのである。

賀茂川へタべな下駄浮く(武玉川十三)

はけだし此亂闘の後日譚であらう。

現在も變る事なくこの神事は立秋の前日に行はれ矢取の神事と併稱せられてゐる。大江匡房卿の和歌に

河社秋をあすぞ思へばや浪のしめゆふ風のすしき

とあつて水無月夜の翌日より氣候は早秋となるのであつた

草々輪に成つて涼しき御祓川(武玉川初)夏菊のむすびごろも茅輪哉(同八)夏秋の唇ぬれる御祓川(同十三)夏帯の結び心も茅輪哉(同十四)日雨も御祓を降るがおん詰り(同十六)はつ／＼のを彩る御祓川(同十八)翌やなぎ秋さは見ね御祓川(同十八)祓川夏の印しも晦日ぎり(柳樽四七)然して翌七月一日より十日迄は、『子蘭盆會』が修せらるゝの古例であつた一日次記事。そこで

翌日とは佛へわたす御祓川(武玉川七)茅の輪から出て踊の輪へ抜ける(同十二)御祓川一ち夜明けの法の聲(柳樽十六)翌日から佛へわたす御祓川(同廿六)等の句も詠み出されたのであつた。『忠見歌集』の

みなかみの心ながれてゆくみづにいさなごしの神樂おもしろ

の和歌にも詠み出でらるゝ如く祓の神事の後に撤宵神樂が奏せられたものである。俚俗所謂『夏神樂』と稱するは是であつた。

女のうまくなれる賀茂川(武玉川九)其夜はねる水無月の神樂堂(川傍柳三)今でも地方の農村へ行けばそうであるが、往昔には六月晦日と十一月晦日の兩度に節季をしたものである。江戸子が節季除けに大山詣でした如く、贅六共に取つては、夏越の祓祭詣は唯一の安全地帯であつた。それは

御祓の留守に大屋来て居る(武玉川十)請取も共に流るゝ御祓川(同十一)御妾の手形流るゝ御祓河(同十四)はつす夜のはじめ御祓川(同十四)等の句が其間の消息を物語つてゐる。かくては宅に留守居する細君こそよい面の皮で

女房にさばしりみ御祓川(武玉川十三)の歎聲を發したりしや否や、唯一人神主のみは懷もあたゝかく、ほく／＼して何日も不拂なのに引きかへ、六月の晦日神主いゝはらひ(柳樽四七)

……高津北坂の寄居にて……



川柳塔

○

長谷川一徹

談合の果がおすしに決まるなり
 オゴルゾミ云うてクリーム命じたり
 ビクニツク看護婦蔭でねてしまひ
 此處よりは港區さなり砂けぶり

(吉野にて)

花を訪ひ御いさしさに額づきぬ
 丸髻をはやしてぬしは風呂へ行き
 書割のやうに愛の巢出来かゝり
 愛の外に眞理あらんや軒深し

○

浅井冷々子

柳塔

○

住田 亂耽

永久の心算で親爺家を建て
 病人を息づまらせる二號邸
 シルクハット取れば成程売けて居り
 懷中が氣になり風呂を見合はせる
 小一町濁して蜆一さ握り
 慾徳を外れ熱心あふれて出
 午後の授業へ草笛がなる
 大學へ行くのもいゝが親の年
 短靴に春の埃のいさゝかよ
 金口をふかして父の居間を出る

母ミ居てコーヒ茶碗に街こひし
屑籠へゆううつをすて憂鬱を捨て

ある日巡航船にのりて三男

大阪の横顔へ水のくちづけ
生活の裏をうつして濁る河
知人あり鯛のはま焼送りくる
處女の國から名を消してゆく

○ 松盛 琴人

馬鹿の怜悧のミ偶像を崇拜し
妊娠の妻へ勤めをよくつづけ
姑は寸鐵ミ云ふ口を利き
捕まつた掏摸觀念の冷かさ
刑後の更生を善人にあらしめず

○ 伊藤 緑之助

ほつねんミ春を見送る桑畑
人間ミ酒ミ比べてみる夜かな
酒の氣の離れかけたる泪よな

○ 朝田 新水

ご寮んさん別に芭蕉を買うて置き
暴君に育てあけたる母の罪

つゝましい心が欲しい母子なり
繼母が俺を達者に育てたり
その上に白痴はぎもる癖があり
愛敬もなく煙草屋はじめたり
戀人へ驅け出すつもり母がゐる

○ 岩本 素人

爪形を入れて筍值切られる
迷ひ迷うた末にぶきりよう
三越を迷ひ迷うて買はずに出
蛸配の事別荘で考へる
アラビヤの唄で女給の拭き掃除
研究所材料を賣る仕組なり

○ 高橋 かほる

脊のびして嫁は舅の襟を折り
兩替屋も一度庭を掘つてゐる
遊園地ここの人か垣を越へ
菊の露口三味線にまけて行く

○ 伊藤 愚陀

否定しつゝも戀ミなりゆく
夜業の灯親子へあをくふりそぐ

大金を預る程に白髪殖ね
肩ふれあうて初鮎のごこ

○ 松丘町二

失業の身へ圓タクが辭儀をする
頬骨へ大大阪の煤が降る
持てあます閑電車賃ばかり要る
坐食してをろかなからだ肥つて來

○ 水谷鮎美

春の風椿すぐれ 大輪に
春の灯がうるんで見へる女の子
一羽二羽三羽 四羽五羽 春霞
春を唄うて足なみをそろへんか
春の朝巡査部長に成りあがり
春水に十九のはるの手をつける

○ 六角柱風

十四金ルビーは赤し戀の身に
ビリヤード春の氣分で勝つゞけ
氣持よう酔うて歸つて子に泣かれ
伊達卷の姿南地の朝景色

○ 川合舟々

きりようが悪いだけに女は疑ひぬ
嬢さんの隔がまれぬ夫婦なり
嘘を書きく俺ひこりではない
母さんは歸つて來るこのみ思ひ

○ 岩崎柳路

スポーツがぎうのこののミ藝者言ひ
ジャズバンド冗談の様に一人吹き
都々逸の字が消れて居る妻揚子
女車掌バンドを堅くく締め

○ 中島鐵州

其價値を電話の有無に論じられ
石に松植にようミ母は縛り付け

○ 酒井駒人

貧しさをどこまでかくす氣か女
行列の旗を貰ふも親心
居酒屋を出て行く姿父に似る

○ 橋本二柳子

あそこならよいミ奉公先をほめ
約束が違ひますミ女の方が云ひ
悪口を言はれてるても酒をつぎ

儲けにはならぬが町へ提けて出る

◇ 島田 翠峯

一生のごこでつまづくこころやらん
病院の連れも足向く一心寺
信すれば神の言葉の恐ろしく
男かご問へば奥から抱いて来る
よじのほる事に貧乏餘念なし
頼んでは居れど哀願して居らず
上品に住むには金の要る近所

(病室にて)

方角もはつきり知らず病んでゐる
親友の心盡しが咲き揃ひ
親なればこそそのそうかも有難し
窓明けて見るも横堀川の水

(退院)

出て見れば一人歩きが恐ろしく

◇ 中澤 濁水

旅役者子を伴れてるは座長なり
口が無く父も蹴打つ大學出
陪審員未決のやうな氣も起り
新調の服すき焼をチト退がり

辻堂へ芝居らしうに妻さかけ
裁板を借りて我家を狭ばめられ

◇ 牧田 普門

介抱の母をはつきり拜む夜
内職の母の二圓が又届き
六年になる鳥打の戀しさよ

◇ 中見 光路

手傳に來たのが釣瓶より過ぎる
悉く米の相場を忘れかけ
天井へ儲かりそうな想が湧き
疎ましく今日も金庫を開ける役
くすり湯の中に筋骨逞ましき
雨垂れのひみつくに水は澄み

◇ 友淵 貴山

朝詣りあの妓の素顔素足なり
漬物が好きで子供の太りやう
無禮講なごゝ階級つけてゐる
自負心もなくついてゆきついてゆき

◇ 安西 杏三

誰にでも許す氣セルを着て出かけ
見送りの仕事の内を諦める

葬儀でもいゝさ圓タクよつて來るかたまつておきな姉妹の御焼香

◇

楊井 二南

上役にその眞面目さを笑はれて春なれば曲藝團の娘も笑ひ獨り者土産の主を考へる其の夢を坊主枕が知つてゐるネクタイの色に京極相應しき凡才を肯定しても損はせず先輩云ふ名の下に金が要り

宇治にて (二句)

宇治だんご母の趣味なご考へて興聖寺までの渡しを見送られ

◇

水田 桐郎

五萬圓なら片足くらいよい云ふ頼ばつた御のまんま抱きに立ち亡き母を思へば夜汽車聞けて來

◇

奥田 雪緒

回覧へ給仕一日中を割き觀劇に羽織の紐のしやらほぎけ學問をよそに甲斐性家を建て

十呂盤へ帳場怒つた音をたて氣味悪い足跡がある夜の土

◇

粒々集

朝鮮 蛭子 省 二

七 喰

けんけ咲き犬芝居の犬遊ぶでる大掃除住みなれて握飯くふ帽子かぶつて手が届く遅櫻集金日の銅貨落ちてる椿落ちてる火鉢から石が出てくるあひびきの朝木の芽雨して鼠取りの鼠動かぬ犬が吠へて歸るよワラビ賣まける

東京 富士野鞍馬

完全にだまして女怖くなり梅干の種二つある宿の朝藝者屋の仕度座敷へ緋がこほれ泣く度に乳を吞ますも若い母隣室の話を書けば儲け口ほめられたそこでさられる貰入子澤山てんでに辨當つめて出る



川柳略語解

追加の三

西原柳雨

第四卷第七號「追加の二」を投稿した以來暫く御無沙汰をしてゐる升が、其後何かの折りに書留めて置いたのが七八句あるから御披露致します、例に仍て若し間違つてゐたらごしく御叱正を仰ぎ升、

村きむす大きな聲でやだアよう

娘はむすこ略するこは普通にて別にいふ迄の事はないがやアだ或はやだアはいやだの田舎言葉である、東北地方では今日でもおらやんだなごいふこ奥羽の境に一步を踏込んだ人々の皆知るこころである、句意は男に戯談なごいはれた生娘が、大聲を出してそんなこはいやだよ云つたことになるが、此句は柳樽の三十四篇に收めてある、三十四篇は文化二年（一）の發刊なれども序文に初代川柳の選句を多く収録したこあるから、その句の年代を限定するこはち難かしい、

思ふに内容の句は多く天明代以前のものであらう、さういふ句の印には以來（×）を用ゐるこに極めて置く、

神儒佛ごたまぜにするがく見世（文化）
下五からくみせはがらくたみせの略か
思ふ、御神酒館もあれば、四書五經なごの古本もあり、又隅の方には佛の金椀も轉がつてゐるこいつは骨董店の叙景であらう。

安くになりましたこ經ちきで買ひ（文化）
ちきは蓋しちきりの略、一體初經なごは目當り一匹一兩さか二兩さかで賣買するものにて、高料に掛けて幾らからなごいふのはぐつこ後、『百するこ大道中が天窓也（安永）』こいふやうに成つてからである、

立雲の俄に見ゆる向島（寛政）

立雲はたつくもか『たちぐも』か不明、立つ雲なら夫れもよろしからんも、立ち雲なら冒頭タの字を省略せるものこしか思はれぬ。

俳句なごにて下五にタ立哉とある場合にはゆだち哉と短く發音する慣例に成つてゐるさ心得居るが、川柳でも字餘りの語呂惡しきを思ふで、タ立雲といふ代りに立雲といつたものであらうと思ふ。句意はいふ迄もなく三圍社に於ける其角の雨乞、

朝がへりやぢの焚く火で這入らば（安永）
やぢは恐らくはおやぢの略か、夜明方にほんやり我家に歸つて見れば、親父が掃除した塵埃や木の葉を門前で焚いてゐるので、歸るにも歸られずさ息子大に當惑の體、『朝歸り遠くで見れば掃いてゐる（明和）』の姉妹句であらう、尤もやぢの焚く火は『みかき守るじの焚く火の夜はもね』の振の樣にも聞ける

色男國を五久くれこいふ（明和）

國は國府の略にて、見得坊の若旦那株が吉原に押出すに、まさか青臭い地煙草でもあるめねこ、薩摩の上等を買つて入



一路集

【募集句】

老夫婦

森東魚選

ここへでもついて行く老夫婦 一柳
 老夫婦近所へ早い戸を閉める 市公
 離れるこやは淋しい老夫婦 狂雨
 老夫婦空地へ少し何か蒔き 駒人
 老夫婦一つ違いを笑い合ひ つばさ
 夫婦わるさだわさ雞草を取り キヨシ
 老夫婦型の如くに共白髪 白鶴
 老夫婦ころり死にたと言ふ願ひ 鐵洲
 老夫婦二月堂を寒う出る 與詩天
 連れ立つて歩く二人を孫笑ひ 吞陽
 金婚の我が来し方を記事に見る 光哉
 老夫婦もう朝顔へ起きてゐる 萬樂
 老夫婦小鳥の餌はご飯を焚き 文芳
 別荘に飼われ律義な老夫婦 普天
 問題の案外多い老夫婦 不然

老夫婦いつも揃うて家を明け 柳
 老夫婦今日は口繪に寫される 没食子
 身じまひに武家出の見え老夫婦 新水
 老夫婦萎びたまゝに仲の良さ 天絲
 昔ものだすさかいな老夫婦 喜由
 老夫婦土鍋の飯に今日暮れ 桂枝
 老夫婦今日も同じ愚痴を云ひ 公二
 老夫婦朝を静かに起きて居る 今雨
 爺婆と呼んで呼ばれて仲がよし 善治
 老夫婦コトリこも部屋にゐる 多聞
 老夫婦枯木二本のやうに生き 白人
 老夫婦家賃で餘る暮しをし 同路
 老夫婦だけが拜むに暇がいり 光路
 老夫婦分らぬ記事が日々に殖む 同堂
 落付いて年寄り夫婦汽車を下り

川柳類題索引 (5)

川柳雜誌自第一號至第五十九號

安井ひろし 共

越村如香 編

安井欣女 編

題の配列はすべてABC順、題の下の日
 本數字は川柳雜誌の號數、算用數字は其
 號の何頁を表はす。

(三) 家庭及家族 (2)

息婚	子	一八	五七
		12	52
二姪	階	五	五〇
		44	58
	新		妻
			五九
			47
叔弟	父	一四	二二
		28	28
	夫	四	六〇
		50	
親	子	五	五
		54	54
	夫		
			五六
兩親		一八	五二
		48	54
先妻			
			二二

渡初め初めの二人杖が入り同
孫共が来て隠居所に日が永し同
佳
老夫婦墓の話も出来て居り緑雨
ちんまりとして老夫婦餚を甜め多聞
老夫婦同じ薬を飲んで居る高峰

寢臺

船室の寢臺へ就くミ波の音時雨郎
寢臺の前に院長の背が高し正春
絹夜具ミ別に寢臺おかれて居新水
寢臺へ昨日ミ同じ花が咲き穂波子
寢臺になじまぬまんま朝ミなり高峰
寢臺を三つもミつて赴任する普天
寢臺へ載る丈け載せる大掃除鯉魚
寢臺車兎に魚母は寝るミきめ専路
寢臺の向ふに母ミ妻の顔市公
もう悔み聞く寢臺ミなりにけり光路
寢臺に新らしくある松葉杖白鷗
職長の見舞ベツトに起き直り今雨
アバーミのベツトが俺を待つぜ鐵洲
御臨終です寢臺へ泣き崩れ陽氣亭

念佛

それからの母念佛をくちづさみ湖山

藤椅子をこの頃買った老夫婦駒人
老夫婦わしが先じやミ死たがり清路
老夫婦チヨコく腹かへるミ同
老夫婦の淋しさへ来る小包たけし
老夫婦火鉢挟んで雨を聞き同
(軸)隠居所にもう死の二人也東魚

矢田冷刀選

もう起床ラツパ寢臺皆動き同
ベツトから窓を横きる雲を見るたけし
退院が近いベツトの白さなり同

七客

寢臺へ囁くやうにバラが咲き京郎
寢臺を向き換へられる庭へ春文芳
全快は今日寢臺へ感謝する波紋
寢臺へ硝子越しなる春の色没食子
寢臺へ昇りたい子が見舞に来光路
駈つけければベツト指すばかりミ
ベツトにも馴れ日本を遠ざかりミ
(人)寢臺へ子供小さう病んでも吉朗
(地)寢臺の敷布もまぶる晴れミ
(天)寢臺へ晝の病人腰を立て京郎
蝸牛

松竹内多間共選

寒念佛小娘らしいのもまざり秋無草
何不足なく念佛に日を送り善治

親類 二〇二三 四五五七 四六五〇
舅産 二一七 四六五三 言 四七四三
出産 二七三五
産後 三七三〇
世話女房 五〇五六
次の間 四四四二 妻 四〇二三
嫁 五一五三

(四)衣類、装身具

拾 二一八 五三三 五八四七
厚司 四一四五
帽子 二七三五 五八三六 四一四二
伊達巻 三四三七
襟 十九一三 襟 卷 三九四四
襟 二四二六
平常着 三四三七 四一四二
蒲團 三九四四 五九五一
外 二七一二 五一三七
ゴム靴 四〇八四
三七

(地)念佛のやつミこのごろあはれ
(同)晝風呂に念佛苦勞したからだ
(天)頑是き念佛母ならんでる

○ 琴 人 選

強情な父念佛にフトなづみ 耕民
念佛を唱へて少し 樂になり 繁坊
念佛の百萬遍へ飽きた聲 湖山
念佛の聲賑やかに百年忌 青果
寒念佛母は先きから出して待ち 秋無草
極樂へ行ける氣であるお念佛 楠堂
たゞわけも本堂はなまんだぶ 突支坊
藥湯で唯念佛を唱へて居 鬼逸樓
錦欄の袈裟念佛の雨が降り 佳水
念佛講慾深かさうな顔もあり 鯉友
南無阿彌陀佛。六字だけ知る居 銀朗
枕頭に待し念佛も口の内 興詩夫
門念佛へ夫婦いさかい 湖舟
赫つミしたらしい念佛ふるへる 波紋
笑はれもせず念佛の珠数を繰り 樂山人
神様も南無彌陀佛で拜んごき 猿々
放送の念佛に祖母珠数を持ち さを
念佛を小僧わかつた顔で云ひ 蛇蛇馬
念佛を唱へたミこで助けられ 無鬼
お通夜の念佛だんく横になり 花蝶

念佛を何も知らずに子は覺へ 市公
雷に祖母念佛で光り上げ 柳
寺町は念佛の聲で門を明け 勇宗
父の念佛孝行をする氣にもなり 沐天
念佛へ父の重たい咳の癖 公二
燒香の念佛咽喉に引かゝり 病みつけ
念佛の盛り遠縁顔を見せ 高峯
念佛の盛りに遠縁顔を見せ 柳村
念佛を唱へて母の軽い咳 柳村
一人減りただ念佛に暮れて行く 柳村
信仰に生きるばかりミ手を合せ 柳村
念佛の僧の影壁へ長く伸び 柳村
吾が事に通夜念佛は思はせる 柳村
念佛を唱へる様な年になり 柳村
永からぬ身だミ念佛言ふてゐる 柳村
臨終の床を念佛取圍み 柳村
もう夜半らしいに念佛まだ止ま 柳村
諦めた褥念佛だけ唱へ 柳村
念佛を言ひく人をだまして 柳村
嫁の事考へながらお念佛 柳村
念佛のまだるい夢に陽があたり 柳村
もう俺は念佛の外用はなし 柳村
念佛を後家は忘れたやうに生き 柳村
念佛を唱へて母は寢間へ入り 柳村

裾 一五 10 襦 衣 二六 15
セ 二九 32 支 服 三五 32
白 三四 13 支 那 五七 52
ステツキ 三五 33 袖 五八 45
裾模様 三七 37 口 三八 13
染直し 四一 31 制 四二 51
白靴 四三 48 七 12
敷布 四四 50 四七 50
T 一二 38 四八 65 二五 19
丹前 四九 34 四九 56 五九 51
手拭 四八 70 五九 51 五九 43
手足 五一 54 五九 51 五九 43
詰襟 五五 50 五九 51 五九 43
U 五九 53 五九 53 五九 43
腕時計 五九 53 五九 53 五九 43
綿入れ 二六 12 和 服 三三 13
草鞋 一四 12 和 服 三三 13
Y 二六 16 三三 33 四四 58
洋服 二六 16 三三 33 四四 58
浴衣 四二 53 四三 56 四四 58
Z 四四 54 四五 57 四七 47
座蒲團 一七 16 四七 47
三九

念佛もなく假埋葬の終りたり 鐵州
 歎歎く聲をうしろに經を上げ キヨシ
 念佛ミかわつた聲で嫁を呼び 青水
 小言云ひつゝ念佛をつづけ 潮多浪
 判らふミ判ろまいがミ僧の合唱 太路
 念佛は序のやうに珠數を繰り 吐句坊
 寢返りを打てば念佛らしい聲 吞陽
 念佛の影を蠟燭踊らせる 一柳
 念佛を唱へる年で戀が成り ひさし
 念佛の途切／＼に子を叱り 萬樂
 念佛のおかしき嫁ひよいこ立ち 雨月
 念佛なぞに縁遠く生き たけし
 成功をして念佛を忘れて居 狂雨
 叱るのミ別な聲にてお念佛 今雨
 念佛が眞面目に云へる嫁になり 柳影
 念佛は知らず讚美歌よく唱い 喜由
 寝つかれぬのに念佛の長い事 天絲
 花嫁は宗派の違ふのに困り 木偶人
 念佛の母へ夜學は歸つて來 虛白
 心では脊いた子へもお念佛 光路
 蔭口の達者も婆母のお念佛 善治
 念佛ミ別に其日の暮し向き 光哉
 念佛をひねもすつゞけ京巡り 文芳
 さて歸る顔の念佛俗になり 没食子

次の間の念佛嫁は睡ふ聞き 同
 いたづらを叱り念佛又續け 嘉月
 念佛に曾へば死ぬ事ばかり言い 同
 念佛の聲北風が持つて行き 黒天子
 念佛の氣になり切れぬ年であり 同
 温泉の瀧に念佛低ふ湯治客 冷々子
 念佛の何を頼むか長い事 同
 念佛の耳へ鐵瓶わいた音 悟空
 念佛のうしろに子供寝てるなり 同
 念佛に宗旨違ひミ氣づくなり 新水
 念佛を母の持病の様に聞き 同

佳吟十句

念佛の鼻へ目刺の焼く匂ひ 清路
 鏝鏝ミして念佛を稱へない 善治
 寒念佛ゆる／＼非常線を抜け 折草
 嚴肅は和尚一人の聲になり 光哉
 畫風呂に念佛苦勞した体軀 文芳
 念佛の勿体なくも眠くなり 松風
 念佛の横で番茶が冷へてゐる 駒人
 念佛も儲け口には向きを變へ 好緑
 猫の死へ念佛投けて通り過ぎ 山茶花
 念佛に隣の飯がこけてゐる 新水
 (軸)一人身をばさず知つてお念佛 琴人

天花粉りゆうひの

やうな顔になり

かほる

御打粉

匂ひ入

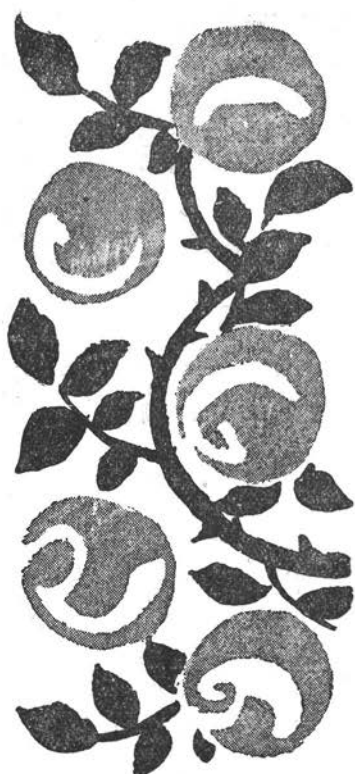
松まつ

風かぜ

本舗 伊藤大一堂

發賣 高橋盛大堂

到る所の藥店化粧品店
 にて販賣す



BUILDING

「言ふ句をふと思ひ出した。全く句その儘だつた。私にはおあつらへ向きすぎだつた。その背の子と言ふのは、は、それにひかへて日本服、れつきこしたかすりの着物をきせて貰つて居た。と同時に、この子の思想はもうかすりを着せられて居るのを思ふて、何かはゝわれました。」

石切さん

高橋かほる

大阪ビルや堂ビルの向ふを張つて、こゝへビルディングを建てた。まだ、明いた部屋が幾つかある。居住ひが、悪ければ明室も出来る筈だ。間口も奥行も自由ではあるが一人で各室を借りられては、ビルディングのカラーが無くなるから、その點は借り主の川柳味で制限して欲しい。(不朽洞)

この子の思想

空氣亭主人

古風な軒並のまじかかび臭い村を通り抜ける。私の目の前が急にぱつと明るくなつた。道はもう和鮮な初夏の野の中へ流れて、まじこんでゐる。

かういつては月並だが、私はワルツ物の何かを口ずさんで歩調をもつと大きくして見たい衝動に驅られた。

「ミ、その私さ、一問程前方を後から一目見ても判る朝鮮婦人(彼女)は、みすほらしき故國の衣服をきてゐた」が、いたいたけな子を負ふて行く所へ行くさ、いつたやうな歩調で蓮歩を運んでゐるが、彼女を追ひ越すまじに見える、その背の子は、ぐつすり寝入つてゐた。その時に路郎師の

母の背で寝入る朝鮮人の子よ

石切さんで、友人二人が顔を叩へてもらつたのか、こゝこゝして、お禮に手洗鉢へ半染の手拭を上げた處へ、いづばい氣けんの若いしゆう二人が、拜みに來て、型の通り口をすゝぎ手を洗ひ

『なアをい、同じ手ふくのんなら、新らの手拭でふかして、もらをかい……』と、つくくの手を新らし、手拭でふいた。新らの手拭は、見てゐる間に、くしや、／＼になつた。拭いてもらふ様に、上げて、手拭だが、納めて、すぐ目の前、でぬらされたので、友人二

人は顔を見合はつてゐた。……私も惜し
ひ氣がしました。

私方から南へ三軒目の、今では私方と選
い親類筋に當たる花田咲子は、んが丸まけ
の結立で好い世話女房ぶりで切手を買ひ
に來やはつて好い聲で

菊ハ露口三味線にまけて行き
の句に共鳴されました。嬉しくてなりま
せん。

啄木と川柳

出口善治

(一) 石川啄木は川柳なんか作らなかつた。
啄木と川柳とは何の關係もない。そう言
つてしまへばそれまでだが、私は啄木の
歌に川柳味を見出し又現代の新しい川柳
の中に啄木を想はしめるサムシングのあ
るのをしばしば見た。啄木と同じやうに
見、啄木と同じやうに考へ、同じ生活に
生き、同じ悩みを持つてゐる川柳家の作
ならば、そこに啄木を想はしめるものゝ

あるのは當然のこゝでもある。
かうしては居られぬ火鉢で立ち 南枝
さりさめもない空想からふさ我に返つて
いつまでもこうしてゐる時ではない、自
分にはせねばならぬことがある。そう思
つて火鉢を離れてはみたものゝ差し當つ
て手を着ける仕事さてもない。
作者は空虚な行詰つた生活から脱しやう
とする氣持を詠んでゐられる。この氣持
を啄木は

『かうしては居られずさ思ひ立ちにし
が戸外に馬の嘶きしまで』と歌つてゐ
るのである。

この頃の嬉しさ爪を磨くなり 愚陀
波瀾のない静かな若々しい氣持が積極的
に描かれてある。これに對して啄木の『
何さなく今朝は少しくわが心明るき如し
手の爪を切る』は多少淋しみが加つてゐ
るが、さにかく兩者はその取材に於てよ
く似通つてゐると思ふ。
本誌四月號の『假の姿』に出てゐた、か
ほるさん句、『うきん屋に子持は遂に坐
らされ』と、その漫評を讀んだ時、私は

喫 茶 と 洋 食

スウハィテンリキ

中央送達局から東京二丁目大科學街へ出る角で

(天王寺區烏辻町)

初夏

の夜は詩人でな
くとも家にじつ
と坐してゐられ
ないものです。

まして詩人には
堪へられない淡
い悲しみに閉さ
れるものです。
香りの高い酒と
美しい日本娘が
あなたをお待ち
してゐます。
是非お談しがて
らお遊びに……

(川柳家楓林
君の營經)

直覺的に啄木の『わが妻の昔の願ひ音楽のこゝみにかゝりき今はうたはず』と云ふ歌を思ひ出した。

現代の若い女性が、學校から家庭へ、換言すれば浪漫的氣分から現實的な生活に這入つた時、總ての夢と理想とを惜しけもなく捨て、家の爲子供のために獻身的に盡す。そこには批判を超越した美しさがあり、没理性的な愛と熱さがある。しかし、これを客觀的に見た時、言ひ知れぬ女の淋しさ、はかなさがある。かほろさんの句をつき詰めて行けばこの淋しさに到達する。

右のやうに啄木の歌と現代川柳とを並べて、兩方に相通するものを検討して行つたならば、萬更、啄木と川柳とが縁のないものでないことがわかる。

(二) 啄木の短い生涯を便宜上三期に別て考へるならば、第一期は彼が未だ従來の短歌から脱しきらなかつた時代で、所謂彼のロマンティズム時代である。その後、歌に筆を斷つて誌や小説を試みたが

直ぐ又短歌に戻つて來た。しかしその時の歌は餘程今までは趣が變つて啄木自身を鮮明に出して來た。これが彼の第二期の時代で、概してこの時の歌に川柳味のあるのが多かつたやうに私は思ふ。次に彼の第二期の歌を數首あげて考へて見よう。

一線の上に少女と若人逢ひて百三秒動かんせす

こゝでは啄木は『竹久夢二』式な講家である。

形あるもの皆くだき然る後好むかたちに造らんぞよき
蹴足なる乞食の爺に物乞はれ一つの沓を泣きて與へぬ

こゝの啄木は社會主義者である。

かぞへたる子なし一列幕進らに北に走れる電柱の数
昨日まで胸に十字をきりし指その指をもて君をゆびさす

小蟻もあかき蚯蚓のなきがらを日に二尺程曳きて日暮れぬ

腐るべき卵まつひに孵へるべき卵ありて相似たるかな

西方の山のあなたに億兆の入日埋めし墓あるを想ふ

之で見ると啄木は川柳家だ。而も最後の歌は何となくみなナンセンスだらうか。

第三期と云ふのは『一握の砂』以後で彼が歌を三行に書き初めた時代である。この時の歌が彼をして いわゆる生活派詩人たらしめたものであつて、多くは小説を内容に盛つたやうな切實な歌ばかりである。本文の最初にあげた三首はこれに屬するもので、それと比較した三句は啄木を川柳で行つた作風の例である。尙このやうな例は五月號の『川柳塔』にも見うけられる。

戸槌をかきこそ雀の接吻 亂歌
枕元に手紙並べて寝たりけり 素人
貧しさは蟷螂さへも早く消し 駒人
悲しみのきこかにほつこころ心 町二
じつと見て蚤の力を試してみん 柳路
啄木がもし川柳を作つたさしたならば、さだめしこんな句を詠んだであらうと思

ふ。

(三)啄木の口語調の歌が彼以前の歌に比し表現に於て自由奔放なること恰も現代川柳が俳句に對するがやうに私は思ふ。品格、季・題について八釜しく言つてゐる今の俳句は丁度演出のきまつた歌舞伎劇のやうな観がある。歌舞伎には將來がない。我々は規則の中に生きられる程小さくはないのである。規則は我々に取つては障礙物でなければならぬ。俳句は田園詩であつて都會詩ではない。川柳は都會詩ではあるが田園詩でもあり得る。川柳は明日の詩である。何故なれば川柳には規則がないからである。又啄木の歌を引き出すが

かくて又我が生涯の一卷の劇詩の中の一節を書く

云ふのがある。私は川柳一句をものする毎に、作句に於ては拙くとも常にこの氣持で精進して行きたいと思つてゐる。

(完) 四・五・四

灰燼の中に

松並光哉

悲惨の極は順境への第一歩であり、すれば私の現在正しくそれであるかも知れない。病褥二ヶ年の呻苦の中に二人の愛兒を残して妻に夭折された。さらぬだに呪われた痼疾の餘りにも殘酷な運命の虜けに寧ろ永遠への眠りに入るこのいかに幸福であるかをさへ思つた程であつたが奇蹟にも再生の喜びに會つて見れば生あるものゝ歡喜は矢張り大で希望の萌芽は種々なる方向に伸び始めた。然しそれ等の希望や歡喜も種々一朝の儚さ命脈に過ぎなかつた。四月二日と謂へば早い所ではもう櫻花に陶醉してゐるであらう時又しても類焼の厄に罹り一物を残さず灰燼に歸してしまつた。斯く絶へ間なき悲惨の数々に直面して來て尙床證の出來ない私生涯の不安を想ふならば一日として平靜な心を維持する事が出来なかつたのであらう。素より心弱き私はが等事實の全部を記憶から抹削することは不可

能であつて、こもすれば亂れんとする心の動搖はあつたけれ共そうした時々には努めて詩作を續けることに據つて漸次冷靜な心に立ち歸らして呉れた。これから的一步は順境へのスタートであり、信ずる事も冷靜なる轉考の賜であつて畢竟柳詩に生る、否生かして呉れる詩の力に外ならない。

停電の後に判つきり點く心

伯林太與里(路郎宛)

○ 出立に際しては種々御高配を辱なりし感謝 仕り候道中幸に無事豫定の通り云る二十一日午前十時頃ベルリン着以來母校出身の方の案内にて市中並に郊外のサンスーシ城(ボツ)ダムに見物に追はれ未だ晝日無之赤毛布を持ちあるき店り候丹度の洋行に當り格別氣づき申候は獨逸婦人に美しきもの極めて稀なること並に大阪市にたいして異ならざる感致し候二點に御座候時下幸ひに御自愛被遊度祈り申上候乍末筆御令室様初め北山悟郎

様へよろしく

四月二十四日ベルリンにて

柳 秀

浪六氏の（い）

津川紫 吻

私は平常浪六氏の著書を好んでゐる。それは今日の所謂神經質的を脱してゐる點に於て、より氏の筆に親しむのである。氏の著書を繙くさ先づ人間性の何ものかを必ず受入れることが出来ることである。氏の著『浮世の裏表』も川柳の引例と評釋、或は後篇の文に於て多量に其點を受入れ得るこゝが出来た。

今日の文壇は勿論、歌壇、俳壇、詩壇共にまだ川柳の非藝術なるを攻撃する輩の多い世である。まして、自己擴張の爲めに他人の領域を陥れやうと入れ亂れて醜態を赤裸々に現出してゐる現今の状態である。

○
その中に於て、しかも堂々、一人ほ

つち的に、文筆に親しんでゐる浪六氏は確かに逸人である。逸才である。一昨年還暦紀念として『波瀾曲折六十年（浪六傳）』を公にした氏である。『浮世の裏表』二十版を私の目に今日ひろけて川柳をとりし氏なればこそ私は切に氏の健在を祈りざるを得ない。

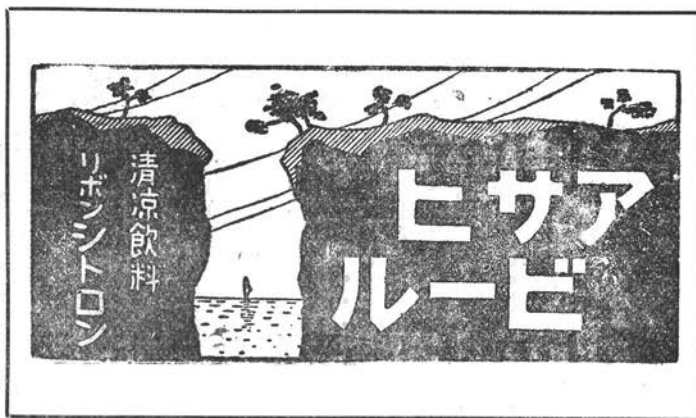
川柳の中にある俳句

岩本素人

私は今松山に居る。俳句王國の松山である。巨匠子規を産んだ松山である。子規堂が在り、居士の髮塔が在り、鳴雪翁の髮塔のある。松山であるその松山に俳句の盛んなのは言ふ迄もない事ではあるが、實際に來て見るに聞しに勝る隆盛には一驚を喫した次第である。

私はその松山へ川柳家として來たのである。初對面である、名刺を出す。ハ、ア川柳をおやりですか……俳句と川柳はされだけ違いますか？、第一問は必ずこれである。別にこんな問ひは松山へ來て

始めて聞くのではないが、殊に松山は前にも言つた土地柄だけにこれが多いので



ある。そこで私も何かの機会に於て私の俳句と川柳の本質的關係と言ふ問題に就

ての主張を表示して置 必ずあると思ふ、そして近くその機會のある事信ずる。川柳は十七字詩の全圏内に存在するものであるが俳句は十七字詩圏内の一部分を占むるに過ぎないのである。(川柳の中には俳句があるが俳句の中には川柳はない) 少しく實際問題に就て研究して見やう。

古來名句として傳へられてゐるこの俳句

古池や 蛙飛び込む水の音
秋近し 隣は何をする人ぞ
ごんばつり今日はどこも行つたやら
行水の捨てこころなし 虫の聲
涼しさに四つ橋を四つ渡りけり
かげろうや手に下駄履いて善光寺
心から信濃の雪に降られけり
親のない雀よ 我と來て遊べ
(旅の空で手元に参考書がないから例に引いた句は間違だらけであらうと思ふが、書けばまだいくらでもある)
之等とは言ふ迄もなく俳句としての名句ではあるがこれ等の句を、假りに今の人々が川柳として作つたとしたなら、私は立派

な川柳として川戴する事に少しも躊躇するものでない。

聖書一卷いたづらに煤けたり
花鉄花の生命のそれとや
會ふ人に逢へずみぞれのとき
湯煙りの中に大佛隠れたる
漱石に子規に道後の湯はあつし
逢ふ事の悲しくなりし海の戀
右に舉げたのは、俳句としても通りさうな句を手元にある川柳雜誌三月號から抜き出したのである。

川柳の中には斯くの如く所謂俳句があるのである。然らば、次に俳句の立場から川柳を観察して見やう。

町内で知らぬは亭主ばかりなり
抱いた子にたゝかせて見る惚れた人
猿轡和 尙を 始め 奉り
と言つた古句、又現代の句では
之れ又川柳雜誌三月號から拔萃するご
あはらし人もまじつて多數決
彼が居らば俺はあの椅子
慰めに呼んだに母は孫の世話
御回診時計ばかりの部屋になり
役者との仲も承知で落着かれる
をとなしく家賃を取らば来る
番頭は丁稚と寝るかいやになり
疑へば俺の頭もひとのもの
雅幽 草木 素人 二柳子 路郎 亂耽
花情 竹堂 志郎 柳川亭 二竹 琴人 革郎

落語きいても笑へない妻
廣い庭見て相談が纏らず
やけ酒も呑る養子のおとなしさ
書き出せば際限がないが、右のやうな句を俳句ですと言つて俳人に見せたなら果して何と言ふであらうが、言ふまでもなくこれは俳句でない。川柳ぢやないか

『一』答へるに相違ない。
そうすると、俳句の佳作は川柳として充分受け入れられるに係はらず、川柳のそれは俳句として通用しないと言ふことになる。さすれば、前に私の川柳の中に俳句はあるが川柳の中には俳句はないと言つたのは決して我田引水論や出鱈目ではないのである。

近來俳句はいくつ行詰りつゝあると言ふ事を耳にする。私は必ずしもしか信ずるものではないが、近き將來に於て或は行詰る様な事がありはせぬか私は憂ふるの一人である。それはあまりに窮屈なる約束の下に創られつゝある短詩なるが故にである。

そこで俳人諸子に切に勧告申したいのは俳句の所謂約束なるものを打破しては

さうか言ふ事である。そして同じ腹から産れ出した所の川柳を手をつないで共に伴に十七字詩發展の爲に盡さうではないか。多くの俳人諸子が憂ふる如く川柳は左様に劣等なものではない。試みに川柳雑誌の一部を手につけて親しく研して頂きたい。(既刊川柳雑誌の残本があり

ますからまだ御覽にならない方には一部に限り進呈する事になつて居る)何も苦しんで狭い城壁に立て籠つて自ら死を待つ如きは詩人として策の得たものではない川柳の有つ原野は廣い。十七字詩の行手は遙に長い。

此の一文は松山の川柳雑誌支部會で

(十二頁より續く)

一の喧囂の中にでも、それは見つけ得られる佗びを言はんさするものである。

戀愛 ビジネス、アルコホール、電流の交錯、交通地獄等々々

……凡てスピーディーであり、忙しいこそそれ自身が快樂である

こいふやうな言葉が認容される近代都市に於て、その多角的、

立體的內容の中に佗びは到る所に姿をひそめて居る。歳事記

のかび臭い中には決して見出されない、新鮮なびち／＼した躍動性に富む佗びがある。だからこの佗びは、佗びと言ふ可く(

話さうと思つてゐたのであつたが、時間が無かつた爲め果さなかつた 松山の方々にも御清讀を煩したい。(昭四三)

創立紀念川柳募集

「雜吟」三句 安川久流美先生選
「砂」三句 中川眼隠子先生選

◇各天地、人、秀句二呈賞

特別募集 各三句吐

課題「螢」 木村浮瓢坊選
「狀發」 宮村柳月坊選

四題合點十五位迄特二記念賞ヲ呈ス
用紙 各題別紙半紙半載住所姓名並記
會費 金貳拾五錢(乞詠草ト同封)

締切 六月貳拾五日全部清記特二嚴守
發表 川柳なれば創刊誌誌上(投句者ニモレナク贈呈ス)

投吟先 石川縣石川郡宮保村字宮保
川柳 双葉吟社

(三五頁より續く)
煙草入に詰め込んで行くならん、されば此句の國はくに訓ますしてこくを發すすべきものであらう。

一体前掲のくたちどもちきわく等の語は世間汎用の略字か夫とも川柳家か特に假用したる略字か其點は判然せぬ、若し普汎のものなれば夫にてよろしからんも柳家特用のものとすれば、後人が妄に襲踏すべき用語ではあるまいと思ふ。

朝飯に鏡をそへて伊勢屋見る(文化)
よく面を見い／＼伊勢屋汁を吸ひ(文化)
一つ共に鏡汁の句にて、甲は汁を略し、乙は鏡を略したる趣向であらう、鏡汁は極めて薄き味噌汁の事にて、吸掛けて碗の中を覗けば、自分の顔が映つてゐるさういふ所から起つた名である。

躍動性にこむので)不適切であるかも知れぬ。只私は靜止的、平面的描寫法しか持ち得ぬ俳句では到底描寫し得ない、又所謂川柳味さはいさゝか異なる一つの都市感情があることを云ひたいのである。(この場合都市感情と言ふのは都市それ自身が持つ感情である)

即ちこの都市感情を感じし之を句にまぎめ得るここの出来るは現代川柳家の一つの特權であつて、こゝに川柳存在の意義があり、又社會に宣傳さるべき使命を持つものである。



川柳社
六厘坊忌

於日本橋俱樂部

天才で夭折された故小島六厘坊忌を例年の通り營なみました。(二柳子記)

路耶、琴人、テルホ、柳影、檐空、月下、善治、夕
鐘、雅流、公二、親月、山雨樓、文久古燈、源坊
沐天、靖弘、石竹、淺念坊、普天、加香、突支坊
文蝶、隆三、一好、里十、丁居、四五磨、つば
さ、小六、桂風、鶴峯、陽喜亭、苔香籠、黒天子、明
萬樂、吉太郎、新水、かほろ、雪峰、双葉子、月
果、正二、舟々、愚陀、亂耽、二南、内匠守、萬よ
し、槍雨、貴山、ひろし、二柳子

兼題
机

路

郎

透

假事務所机の足が一つ浮き
さて何を書かうか机拭いてみる
スタンドに紫壇の机春の色
なやましき机へ足を投げかける
机出す間に友達は葱を切り

善治
同
ひろし
同
源坊

カイ君と土産机の上へ投げ
 ひじをつくだけの机を磨き立てて
 坊んくの机にすわつて叱られる
 悪酔へお茶屋の机淋とすぎ
 履歷書を低い机に書いてある
 亡き友の机淋しく空いて居る
 病上り机に太い息をかけける
 贅成く机の上に腰をかけた
 夏休み 晝の机に心太
 氣まづきは机の中を見たのなり
 榮轉が掃除をしとく机なり
 月給と共に机がきめられる
 子の姿想ふ机へ雨迫るる
 春がゆく机金文字瘦せてゐるる
 姉妹の机氣だての向きく
 もの思ふ机に花の水はきれ
 静かだと思や机にもう居ない
 机からやがて活字になる皮肉
 拜啓と書いて机に重たく居

二亂同琴壽亂愚雙柳
南耽人女耽陀子影
テ
ル
ホ
鮎
美
石
竹
小
六
青
亭
内
匠
守
善
治
古
燈
石
竹
觀
月

中を丸く机に向つて居
又を書くなと机おくられし
か來て復習の机座りかえ
勉強は出來ず机上の京人形
掃餘する母は机へみんな載
泊る氣の母と机の位置を替へ

か
ほ

眼藥を買ふて判屋のはかに
眼藥に二人して指す一しづ
砂ぼり眼藥瓶を持つて居る
眼藥一滴に目をしびたとき
眼藥へ祖母は不安な顔で居
眼藥の滲まない方を買ひに
眼藥がしみこんでから壊の
眼藥がしみて愛人のぞくなり
眼藥をなすに子供をよせつ
眼藥の瓶が出て来るふくる
眼藥をなすに戀人逢ひに來
眼藥の瓶も置かれた女中部
眼藥を今度さす時乾いて居
眼藥へ天井向いてふたをす
眼藥をさして夜中の戸を閉
眼藥に當座新聞から離れ
眼藥に大人の涙見つけられ
眼藥を女優の奥へ入れ
利きますさいふ眼藥を買
眼藥へ夜間撮影から戻り
しゆんで來る眼藥座つたま
眼藥を袂に入れて出る散
眼藥をなすにめくらなと思
眼藥をなすに食てゐる木の
眼藥をなすに食てゐる木の

新健陽善同文る選陽喜新
水秋亭治蝶

新五雅觀二源同源同葉子
水磨流月蝶南坊坊匠守

小テ天新四雅觀二源同源同葉子
六ル秋水五磨流月蝶南坊坊匠守

萬貴悟沐善舟突陽る文同善陽健新
よし山空天治々支喜選蝶治亭秋水
小六し山空天治々支喜選蝶治亭秋水

財布から出るサイコロへ眼をおど
空らの荷を下し財布を出して見る
財布にはもう金のない朝戻り
引出にからの財布の久しくて
買ひ立ての財布に残る綿の屑
おみやげの財布と謂ふを一つ買ひ
節季には茶屋から財布さげて来る
大阪へ行く銀財布へ紐を付け
心ゆつたり財布の重み
その財布交番へ来て申を知り
死ぬほどの事を財布は言はずなり
富義の夢は財布の重みする
財布今つりをしまつた音をさせ
共稼ぎ財布の中に鍵も入れ
割引に二度も財布を出して買ひ
慢で財布を握り値切つてゐる
生僻の財布の紐は長いこと
魚屋の財布の紐の長いこと
むどうさに出した財布はふくれ
おみくじを赤い財布で買ふてくれ
皮財布音の中から釣を出し
晩酌の機嫌財布へ手が延びる
行商の財布よつばはいりそう
れたられる母の財布に糊のつり
母親に新しい財布がまた買へず
小遣を貰ふ財布はぐちを聞き
席題 處 女 互

處女と云ふ力に壓へられてゐる
處女二人道頓堀の風を避け
色街に宵つて處女のつやがし
はめられて来て處女をうたがふ

明 果
源 坊
四 磨
桂 風
月 下
沐 天
普 天
文 蝶
公 二
小 六
文 久
同 善
同 治
同 悟
同 空
古 燈
同 燵
同 テル
同 ホ
陽 喜
喜 喜
同 流
同 雅
同 山
雨 雨
同 選
同 内
守 守
二 南
色 色
双 葉
子 子

投資はさて氣に入つた柄がなし
投資と云ふ荷車の人だかり
投資ハツイ奥様もつり込まれ
投資の輪へ洋傘の邪竈になり
投資は子供へのいたくなり
投資りで少し貰ふのが押して居る
投資の人數程に賣れて居る
投資りを露路の一人が見て戻り

席題 掃除

五

二階から川へ掃き放して
掃除して疑ひ晴れた金指輪
大掃除思はぬ所から五十錢
床下の掃除子供が錢見つけ
庭掃除だけを樂しむ父になり
口歪めてるのへ耳掃除念入り
箒目を奇麗に見せた寺の庭
巡禮は掃除と知つて町を替へ
朝寝坊の亭主へ掃除荒い音
大掃除あつたさつぱりと夕餉する
大掃除軍需の痕を見つめて
大掃除丁稚仙臺萩を眞似
お向ひの掃除へ笑ひ乍ら起き
暇装束抜け出た様な大掃除
此の掃除之れでお嫁に行けるのか
大掃除女房の智恵の棚もつり
郊外に住んで掃除を嬉しがり
塵拂寝てる障子を殴る様
公休日丁稚掃除の早い事
掃除の子ごへ行くにも道がなし
空もよう變つて掃除早くすみ
やり直す掃除神經質を見せ

時雨樓 水川 素持 五健 双葉 巨城 素人 同 健選 山の字 春波 青帆 大鷲 巨城 玄々子 大鷲 素人 素光 時雨樓 同 水持 廣稔 双葉 素泉 巨城 素人 武子 春波 大樓

長椅子へ掃除の女中ソット掛け
掃除する小使朝の音を立
五客りゝさの姿に躍る塵拂ひ
掃除好きと云ふ女房は少しヒス
大掃除すまぜてお茶の味も知り
大掃除子守がみんな連れて出る
天井の掃除を俺に任される
(人)硝子拭く給仕落着しては拭き
(地)お掃除へ新聞持つて邪竈に
(天)流連が仲居へ掃除手傳をか
(軸)うっかりと掃除の町へ金魚賣

五

五

先妻の子には連れ子の負けて居る
連れ子今日も話題の人になり
連れ子ある結婚式はソットする
長男と連れ子と近所やかましい
どう間違つたか連れ子があとな
連れ子なればこそ人前は飾ります
共稼ぎ連れ子の事で又た別れ
連れ子から又晩酌の愚痴が出る
父親も一寸連れ子へ遠慮をし
連れ子モリ學校へ行く歳になり
連れ子だと云はれぬ様に家を替へ
淋しがる連れ子を亭主可愛がり
連れ子たと知る頃家出思ひ立ち
祝言へ連れ子が遊ぶ別座敷
モリ遠慮すること連れ子知居る
末の子だけは連れ子に致します
同じ家苗氏の違ふ子が二人
どうしたか連れ子だんく捨て来
姑の前を連れ子へ眼で叱り

巨城 水持 時雨樓 素泉 武子 逢人川 大樓 水持 素人 五健 蓬人川 大鷲 鬼笑 双葉 武子 武之助 青帆 時雨樓 陽帆 極光 春波 靈雪 廣稔 巨城 水持 素泉 大樓 玄々子 素人

酒癖の父へ連れ子の云ひ淀み 五健

川柳 糸屋町句會(大阪)
雜誌社 四月十九日 於實業會館 川合丹々報

兼題 織

毒

鯉織り氣まゝな風に逆らわす
假驛に近く織も見へてゐて
十日目の織の色はあせている
兒が死んで出すべもなき鯉織
色あせた織もつんで移り行く
鯉織りばんと母の頃思ひ
織の數に顔が賣れてる
鯉織り出世のおそい父を持ち
入營の織の前にうつされる
鯉織り孫に持たせて砂がつき
初日から織の濡るゝ事となり
鯉織り弱く育つて来ましたが
織はならぬ酒のほさばり
(軸)鯉織り母は日陰の身を忘れ
席題 落花 双葉子選
落花粉々女の過去を聞く
失戀の氣持へ櫻散つてくれ
皮包み落花を受けて興があり
石段へ散つて踏れし山椿
抱擁へ庭をはるかに散る櫻
(軸)落花の下のチャールストン
席題 砂遊び 五
呼びに来た母へ片手の砂を見せ
砂遊び未練もなしくづすなり
砂遊びよせて貰へぬ女の子
砂遊び子守がレンガ探して来
赤城 新水 柳影 愚陀 柳影 双葉子 選

(天)境遇のまゝにあるなり春の宵
(軸)石女へ春めく宵の物思ひ
ばんくに踊に廊の春の宵

蔵

同 普 門
同 六選

我儘を叱りも出来ぬ主人の坊
我儘に育つて奉公續きかれ
我儘もしほれて座る百ヶ日
嚴格な父へ我儘膝まづき

健 坊
波 紋
地 湧 子
茶 樂

清き一票無學は假名で書き
當選は威勢よく街を突き抜ける
選舉ビラ落選のまゝ風に捲れ
讀上げた一票ごとに汗をかき

蔵 六
福 助
湖 舟
同

兼題 野遊び

運 坊

我儘を後見といふ名で叱り
我儘の殿二つ目は太刀を取り
我儘を叱り無邪氣を笑つたり
弟の無理兄らしく負けてやり

藏 六

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

羽 衣
十 寅

野遊びは雲雀の下りた集を見つ
野遊びに始めて持った空氣銃
紫雲英へ話の切れた手が届き

阿 波 十

我儘を母怒つたり透したり
我儘を阻んで含めて嫁に出し
我儘を母怒つたり透したり
我儘な心を娘下駄に見せ

羽 衣

今日も又噂の一人消えて行き
噂ほど進んでゐない二人仲
近所の噂子供が可愛そう
パトロンがあるのないの髪結所

地 湧 子
松 汀

野遊びへ親は不景氣な井戸を見
蝙蝠が見え隠れする土筆とり
摘み草の娘困つたものを踏み
菜の花を一わたり見て座をつくり

柳 月

(五客)お前が甘いからださ夫婦
叱られた後へ我儘ちつと出す
我儘を阻んで含めて嫁に出し
我儘を母怒つたり透したり

福 助

新聞へ又も噂の種をまき
噂から噂を生んで女給やめ
儲けてる噂へ金を借りて来る
さりぐの噂が生んで死んでゐる

湖 舟

野遊びをちと騒がせて肥料車
プロペラの音に野遊び座が亂れ
野遊びの野球に父も寄つてゐる
野遊びをしたのも昔家の立ち

福 助

(地)父さんのエヘンに我儘止み
(天)母の氣も知らず我儘連れ
(軸)我儘のありつたけ言ふて瘦せ
兼題 選舉

同

噂の眞最中に伯父が来る
井戸端に力なき咳を噂され
噂は別に嬉しい人があり
町内の噂裏道通り抜け

妙 哉

紫雲英も種菜も咲いたさ便りが來
野遊びに電車道だけ真んぶされ
蒲公英さ子供は春中で寝てしまひ
金客野遊びに疲れて歸る魔法瓶

松 延 子

選舉權誰に入れよと妻に問ひ
一票ご氣をもんでゐる總選舉
若き血の踊る普選へ清き一票
選舉事務所ライスカレーの畫が

比 良 治

花嫁の噂の花が井戸に咲き
臨終へ噂の人もやつて來る
出棺へ近所は種々な噂立て
噂をばもう嗅ぎ分けた記者が来る

村 上

野遊びの度に野遊び聲をかけ
汽車通る度に野遊び聲をかけ
野良の眼にはつきりうつる睦じさ
野遊びに行く子へ悪い方を着せ

助 六

總選舉すんでめつくり瘦せた顔
一票を鉄棒たたく入れに行き
選舉民暴力沙汰にゝがり切り
人望は最高點で當選し

白 洋

噂をばもう嗅ぎ分けた記者が来る
自惚れをすてんからごなりつけ
兼題 我儘

柳 月

(地)毛氈の野邊に自由な氣を擴げ
(天)遊び子へ野井戸の恐さ教へ居
(軸)土手に寝て聞く野良唄の平和

井 藤

我儘を叱りも出来ぬ主人の坊
我儘に育つて奉公續きかれ
我儘もしほれて座る百ヶ日
嚴格な父へ我儘膝まづき

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

兼題 我儘

井 藤

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

來た時にやんだ話の氣にか
噂され親は涙をこぼして
友達に聞けば噂本當らし
噂だ立てて今だに何もなし

喜 留 久

五五

(天)面識はないが氣安う牧師會ひ
(軸)たよられて牧師放漫主義を知

兼題 胸騒ぎ

文蝶

胸騒ぎほうき持つ手がふとまり
胸騒ぎ流れた旅をして戻り

孤舟

胸騒ぎやうくはいた新らの足袋
胸騒ぎちと仰山な母であり

桂風

胸騒ぎだけ意識して男と居
胸騒ぎ我家へ着てはつと

文蝶

春日和まんと店を抜けば抜け
ふところはちと淋しいが春日和

狂雨

阿呆らしてやつてならん春日和
春日の陽を一杯受けて爪を切り

孤舟

春日和寫生の人へ手がたかり
ふらふらと春日の日和を勧誘員

文蝶

春日和五重の塔は低う見え
春日和五重の塔は低う見え

桂風

あきらめて羽織の襟を折る女房
着流した羽織重たい病上り

萬樂

だしぬけに羽織の妻へお茶が沸き
荒い羽織に若さをうつないで

六齋

腕角力羽織を脱いでから負けず
(佳)羽織だけ紋付を着て義理(濟)

孤舟

(軸)脱ぎ捨てる羽織に春のゆらめく
席題 聲

琴人

賑かさ聲が重なりをほてゐる
造り聲しても知つての彼女なり

桂風

二次は調子外づれの聲になり
大聲で主人はごなる癖があり

鴻岐

新妻の聲消えさうに

狂雨

街道はもう夏らしい牛の聲
満員車車掌の聲が届きかね

萬樂

聲だけでわかる下宿の障子あけ
羽織着た丁稚聲迄變つて来

陽氣亭

メリヤス屋買せて見せる聲を出し
艶歌師の唄へ廊の夜が更けて

加香

(軸)船頭の聲が橋まで響いて来
兼題 夜半

同

看護婦のうつゝに返事する夜半
うなされる夫に夜半の冷えるこ

萬樂

夜半まで丁稚寢癖を叱られる
はつきり夜半に吾子の寢息き

琴人

病み細る子へ夜半の水をくみ
戻られねばならぬ夜半の道を急き

暑岐

臨檢に起きて夜半の月を見る
男親夜半に寒う起きてやり

同

席題 難波橋

同

難波橋高飛を見る人集り
思案して渡るに長い難波橋

萬樂

戀人さボートで潜ぐる難波橋
難波橋お上りさんは立ちつくし

桂風

難波橋まで行きませう手がさわり
かんじやくが屏へきつい音をたて

六齋

叱られる屏の隙へ二三人
傳票が運刻の屏の風に散り

孤舟

その屏しめるに馴れぬ女の手
屏のそばでもう絶望さかされる

萬樂

立ち聞の息は屏へ突き當り
ちさきまり悪い屏の前に立ち

琴人

席題 道

琴人

舊道と言ふのへ廻るわらぢがけ
付馬へ時々道ではぐれかけ

道しるべ見ると左へ足が向き
失戀の夜道に強い風が吹き

眞暗らな道を艶歌師唄ひ過ぎ
口笛で夜道を抜ける二人連れ

ビクニクから並ぶ道になり
裏道で今日も彼女と逢ふて来る

道連れとちびつた下駄の齒を競べ
この道で迷ひまして送くられる

舊道に添ふて熊笹おひ繁り
道遠し少時し憩はん石にかけ

道を行く人の足にも春の音
(軸)またそこでお問ひなさい

川柳 堺支部五月例会

五月十一日夜 於大湊家族湯樓上

兼題 雜 巾 路 耶 選

今日丈けは亭主も雜巾かけるなり
女の子雜巾ばかり刺してゐる

當番さ云ふ雜巾を持たされる
拭き上げて見れば廊下に筋が立ち

雜巾はれずみの様にほつさかれ
雜巾を干して暫く我が驅

先づ足を拭けさ雜巾出してくれ
雜巾を縫ふ姑になつてゐる

愛の巢の雜巾に事欠いてゐる
雜巾にする冬シャツを出して来る

又 光

(地)掃く事も兼ねてふいてる長廊下
(天)くみ立ての水に雑巾浮てゐる
(軸)猫の足拭く雑巾にされてゐる
路 郎

煙草入れ底に銀貨が光つてゐる
煙草入れ帯へ覗かす齡さなり
昭和だつと煙草入れ渡して居
おぢやんの矢つ張り大煙草入れ
煙草入れ開けて銀貨が一つ出る
煙草入れ重さを見て旅に出る
煙草入れ出すさ妓のよくしやべり
小使ひも入れて大きな煙草入れ
自漫して空にせられた煙草入れ
煙草入れ中一本くたびれる
煙草入れ見れば個性がうなづかれ
煙草入れほり出から足袋を脱ぎ
煙草入れ額のはが目立つなり
煙草入れ一番頭丈けが提げ
三吉にちさ大き過ぐ煙草入れ
黒朱子の帯か覗く煙草入れ
(人)面倒な話になつて煙草入れ
(地)萬歳へゆくだけ入れた貰入れ
(天)貰入れ息子は貰ひものを持ち
同 路 郎

待ち兼ねた寛輿は近し春の宵
二個の影又二個の影春の宵
料理屋の二階が寒い春の宵
春の宵まさかと思ふ友に會ひ
春の宵帽子をぬいてついでに
春の宵遊びに急ぐ人と見え
衝突の電車を語る春の宵
松 風

春の宵たゞぼんやりと灯がさもり
春の宵紅茶一杯飲んで出る
ゾロ／＼と何處へどう行く戎橋
春の宵俺もコーヒの友さなり
自分だけ不幸に見える春の宵
(客)春の宵我れ獨身の有難さ
(客)春の宵西鶴集を讀み耽ける
(客)春の宵歩きさへすまいのなり
(客)春の宵パラスの道にくたび
(客)圓タクをひやかして春の宵
(人)春の宵ネグタイピンの位置
(地)春の宵紅茶ばかりの戀をする
(天)春の宵下駄の鼻緒を切て来る
(軸)散髪に行くのも惜しい春の宵
席題 約 束 貴山、五輪共選
同 路 郎

約束の金はキツシリ持つて来る
約束を其儘秘めて死んでゆき
約束をキツ／＼で書き終り
約束にしては大きな話なり
正直に履行すれば立ちゆかず
又の日を約して今日はこれで去に
約束の力をこめた握手する
約束に一分前の忙がしき
約束はしたもののさて考へる
お約束ですと座敷をぬけてくる
約束へ言譯けだけの顔を出し
約束の帯に頭を振かされる
約束のベンチに人目多過ぎる
約束の土産ならべて早く寝る
約束の通り嬉しい日曜日
約束の電車のまんが悪いなり
清 路

約束へまだ冬帽を着て出かけ
まちほけをさ／＼してもまだ信じて
約束を無視してまでも逢いにゆき
佳(約束)もよいが實行出来るかへ
(佳)男一匹約束を曲げてゐる
(佳)約束。無明日へ乙女淋しくゆて
(佳)約束を裏切つてゐて道で逢ひ
(佳)正直に待つた我が身は馬鹿だ
(佳)約束を傳言板へ言譯し
(佳)約束の場所へ他人が先に居る
(佳)約束へ指切りもして氣が軽い
(佳)其期日男の意地も立てかけて
(佳)約束の日なり朝から駈廻る
(軸)約束(シヨール)は白う目立
(同)約束に操をけがす夜の泊まり
席題 金 庫 互
同 路 郎

燒跡の金庫へ寝ずの番が着き
金の高知らず金庫は守つて居
輕便に手提金庫が盗まれる
金庫へは知らず指紋を残して居
音一つさせず金庫の重く開き
椅子のまゝ課長金庫に手がとどき
席題 燒き 芋 互
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

燒芋屋湯氣に一へんそりかへり
風呂敷を通して燒芋湯氣をたて
燒芋屋昨日と同日人を見る
堂々と燒芋買へぬ年になり
燒芋の使ひに給仕馴れてゐる
燒芋屋隣りに出来て腹がへり
ポケットで燒芋小僧折つて喰ひ
同 路 郎

焼芋は家丈けて食ふ御令嬢
胡麻つけた丈けて焼芋真く賣れる
冷めたのも交せて焼芋賣れてゆき
待たされた焼芋突いて穴だらけ
焼芋で釣られたやうに用に立ち
焼芋にさへ惠まれぬ子にされる

席題 出来心

許すべしあゝ赤貧の出来心
出来心叱つた我れも淋しゆて
出来心後悔をして長い夜る
出来心とも云へすそれなりけり
出来心出来心では済ぬ罪
出来心として母親の氣が軽い
出来心とは言わず引き立てる
出来心しかつた方も泣いており
その時は夢中で語る出来心
出来心一指したら貢かされる

耽柳會 三十四例會 (兵庫)

水田桐郎報

席題 「鼻」

鼻竇をほちり男の取柄なし
鼻聲で玉子酒をと云つてある
父ちゃんはこの鼻へ駄目を押し
自漫家の鼻の動きを興がられ
鼻先で馬鹿にしてゐる音がする

席題 吊草

吊草に毛氈腕を氣にしてゐる
吊草へ軽く叩いて席を立ち
吊草の片手たもとを押へてゐ
吊草へさがり春の子をあやしてゐる

五輪 同善治 同路郎 同選 萬年青 沐天 不言 松一 善治 樂亭 春江 萬兩 桐郎 尾秋 五彩果 泰山 五彩果 尾秋 同

吊草へ昨夜の夢のさめやらす
吊草を氣にする神經家あり

久郎居隅會 (大阪)

中西久郎報

三月一日中西久次郎新居に於て悟郎孤舟十
字路と僕との四人が作句三昧に夜の更ける
のも知らず十二時過ぎ散會した。

席題 迷惑

新婚へささりの悪い男来る
親切に呉れた西瓜を持てあまし
長話寝むたい顔に遠慮せず
お隣りが酔ふて歸つた午前二時
新婚を京大阪と連れ歩き
女房にすれば勝手な用ばかり
迷惑へ猪口をさし人の手がのびる
壁一重今日も始まるデツカンヨ
迷惑な事には妻が横をむき
迷惑は娘の聲の唄を聞き

川柳螢池支部句會 (大阪)

雜詩 植田湖舟報

五月五日午後一時より教室に於て句會を開
催いたしました當日は本社よりひろと先生
をお迎へして句作に就る先生より句作につ
いて色々有益なる御話がありました出席
者拾八名午後四時閉會す

兼題 雲

天災を遁れるやうに走る雲
郷さして流れし雲の懐しく
うつさり雲の流れに匂ふ春
行水の兒におもしろい雲の峯

日の入りをその儘撮りたい雲の色
風邪引いた心地で走る雲を見る
野邊送り雲も淋しい色を見せ
病上り日向ぼっこへ邪覓な雲
果てもなく雲また雲を追ふ心
通り雲風の早さを見つめられ

席題 旅

父さんの歸りを待つさ便が来
旅先の便りまだ来ぬ不安な日
旅先で妻にすまない酒に酔ひ
旅人宿自慢話に夜が更ける
旅先で子供の便り懐しく
旅先で宿の女中へ嘘をつく
旅先で宿屋の子供なぐんで来
旅へ来て水あたりした床につき
たまゝに酔ふて寝るのも旅の事
流轉の街から街の灯につかれ
旅先の父から安産祝つて来
(轉)旅に寝て鴉が啼けば家の事

兼題 嫁入前

ガソリン機嫁入迄を働く氣
嫁入前娘は母の後に居
髪結へ嫁入前は氣をつかひ
梳子チト嫁入前へきつい櫛
支度金親はご娘まるこばす
嫁入前軽い憐みの日が續き
結婚が迫り内證を打明ける
再婚が嫁入前ださすましてゐ
二人連見ても嬉しい嫁入前
嫁ぐ娘と母も嬉しく縫つてゐる
高島田見達へられたやうになり

柳月 波紋 みのる 同 普門 茶樂 六藏 承天 柳月 瓢箪 同 湖舟 同 普門 茶樂 五申 皎月 波紋 藏六 喋呂久 若草 運坊 地湧子 瓢箪

結婚の明日に迫つた髪をすき
仲人へお茶を出す手がちと慥え
誰も皆嫁入前さ見るらしい
嫁入前大丸からの荷が届き
婚禮が近く娘の落ちつかず
新妻になる嬉しさの帯をさき

席題 珍客 互選
珍客へ活發に我子挨拶し
珍客へ休むさめて更かして
珍客へ花見のことも話し合ひ
珍客に隣の子供去され
珍客へ何から話してよいやら
珍客を門まで送る病上り

紅椿川柳會 (京都)
五月三日 清水光風報

お得意へ行けば旦那のよく喋り
満足旦那 妾膝をよせ
若旦那丁稚へそつ用があり
あれでゐて隅には置けぬ旦那なり
職人の或旦那とよばれたり
大旦那順に叱かつて渡してゐる
髭剃つて来た旦那なり見違へる
つれられる藝者が旦那つてゆき
謹んで旦那へ猪口を奉り
親旦那とはあべこべな若旦那
旦那から先にと宿の風呂加減

軒 紋之助選
(天) なつかしの軒かすかにきこ
(地) 狸寝の軒よつばさきすぎ

光哉
ひろし
普門
湖舟
同選
惠美須
地湧子
柳月
普門
瓢軍
ひろし

(人) 寝つかれぬまゝに軒へ腹をぞ
紫明選

(天) 女房の軒九月の蚊帳の中
光風
(地) 夜業後の軒に荒れし生活苦
風來子
(人) 寝苦しい夜へ軒の兄を見る
双光
紫水選

(天) 飲器飲むと座はつたまゝ軒
梧桐
(地) 試験前軒が辭書の上を這ひ
折草
(人) 雷のやうな和尚の軒也
光風
初戀

(天) 初戀の思ひをこめて繪封筒
浮舟選
(地) 初戀の嬉しさへの字がふる
紫好
(人) 初戀の味も知らずに四十すぎ
双光
(軸) この年でまだ初戀を知らぬ俺
仙歌
浮舟

川柳研究会 (難波)
清水卯三報

席題「兄弟一粒」時「はがき」互選
さて逢えば兄弟別に話なし
臨終の父に兄弟揃うなり
親無き後は兄弟他人のやう
其時はこうであつたさ眞似て見せ
時ならぬ聲に一同立ちあがり
一粒のたれから庭を青く染め
一粒のめしに腹立つ足袋の裏
繪はがきで見れば都はよいところ
よう／＼にはがきが書ける年にも
思ひ付くはがきに古いさころ書き
書きしれず御身大切横に書き

至誠川柳會 (十八回)
五月十三日夜 於天下茶屋興會所

五月十三日夜

兼題 鹿 三輪五輪報
路耶選

大佛さ鹿だけ子供覺へてる
一丁もついて来た鹿途に去に
遠足に鹿は顔貢らしゆう逃げ
背景に鹿も寫つてゐる夫婦
鹿の群今日も散歩か追ふてゐる
連れの無い鹿は山から降りて来る
遠くから鹿に見られてゐる二人
(人) 神鹿の御蔭寫眞屋食つて行き
(地) 鹿に餌をやるに車は待たさ
(天) 取巻いた日傘の中に鹿の子

兼題 蠟燭 路耶選
蠟燭が来れば電燈ともつてる
蠟燭のまじきもせず御内陣
蠟燭に無心の文を拾ふ母
蠟燭に女の顔を凄ふ見え
震災に遭ふて蠟燭備へられ
大佛に蠟燭の火が小さすぎ
蠟燭を探すにマツチ使ひ過ぎ
蠟燭を代へて御經の太くなり
(人) 蠟燭の蠟だけ欲しい子供なり
(地) 蠟燭を邪慳に消して獨り寝る
(天) この暑さ蠟燭飴の様に成り

兼題 軒 朝陽選
軒店の老舗大きく賣りに出る
軒店の親子五人が暮らして居
軒店の屋根を風船おごつてゐ
軒店の上かん乙な味を出し
軒店の納簾に足がならんでゐ

萬年青
萬兩
五輪
黒天子
同杉
一格子樓
朝陽
一稻
選
瓢山
格子樓
貴山
五輪
同坊
堅同
萬兩
同坊
貴山
五輪
格子樓
陽選
堅坊
同兩
萬兩
一稻
稻

新誌友

本誌普及のために愛讀者各位の御盡力によつて益々讀者が増加してまいります。本春から御紹介者と新誌友の御芳名を本誌に掲げてその御好意を感謝してゐる次第です。

何卒此際意義ある川柳雜誌の倍加運動を起し讀者一人が一名の新購讀者を御勧誘下されるならば本誌はより良き川柳雜誌となりますから川柳家に限らず社會一般讀者の御紹介を願ひます。見本として川柳雜誌をお送りしますから御申込下さい。

「川柳雜誌」半年分前金壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友としてここに芳名を録します（四年五月十九日まで）

高橋祐晴、寺地卓一、伊藤愚陀、木山さだを、吉村松風（友淵貴山）、長谷川常吉（楯元紋太）、杉田貞之（長崎柳秀）、倉谷貞治（若井たけし）、玉垣龍子（八木毒仙）、西島伊三（大熊秀聲）、大窪文芳、淺井冷々子、福田鶴峯、橋本二柳子、淺井喜二、越中義雄、外山連、中内松太郎、關五左衛門、立山夢花、岡巖、石井突支坊、森石竹、松田隆、伊藤喜一郎、堤強（本社事務所）（括弧内は紹介者）

差當り軒店探す資力なり
軒店で尤もらしい事を聞き

萬年青
一杉

夢秋へ新建の屋根照りかへし

一杉

猫の戀す早く屋根へ廻つて來
鳩雀驚かしこくも宮の屋根

萬年青
一杉

屋根と屋根火事は近いと疍高い
遮窗針いかめしき屋根の構なり

堅坊
五輪

あの屋根が僕の家だぞ電車で云ひ
教へられたのは赤い屋根白いかべ

同朝
同陽

屋根越しに犬の喧嘩の聲もき
山門の家根を見上げて腹はへり

同萬
同兩

二階借り屋根を見下げて年が増へ
家の鳩太鼓の音に屋根へ逃げ

同萬
同兩

れば土を掛聲で受け屋根をぬり
屋根ばかり見て二階事務を執り

同萬
同兩

屋根傳ひ子供隣へ邪覓に行き
屋根に出て膝頭抱く閑があり

同萬
同兩

角力吟
震動の尻りは月を見て歸へり

路郎
同郎

マーケット女房の財布借りて買ひ
署長まで廻れば話し早くすみ

同萬
同兩

三等は氣樂で良いと濟ましてる
名賀壽會（尼崎）

同萬
同兩

四月六日於大物村區集會所
重役の噂へ影の咳を聞き

吉期報
同郎

席題 噂
あら噂先づ井戸端が口火なり

同萬
同兩

噂程貯めて居るのか共嫁ぎ
番臺は別な噂を今日も聞き

同萬
同兩

東西屋噂をまいて通つて居
亮山
桃谷

同萬
同兩

重役の噂へ影の咳を聞き
あら噂先づ井戸端が口火なり

同萬
同兩

噂程貯めて居るのか共嫁ぎ
番臺は別な噂を今日も聞き

同萬
同兩

東西屋噂をまいて通つて居
亮山
桃谷

同萬
同兩

重役の噂へ影の咳を聞き
あら噂先づ井戸端が口火なり

同萬
同兩

噂からツイ本物になるも戀
里歸り簾の噂に花が咲き

住香
吉朗

成る程さ噂の娘見返へされ
今日遭へる噂の仲居だいてる

同柳
堂白

惚れている證據は噂ききたがり
ストーブえ噂の主がやつてくる

同柳
堂白

席題 幼稚園
幼稚園見ている母も若がり

同柳
堂白

仲裁をする保姆が先づ唱い
プロペラの音に園児の列亂れ

同柳
堂白

幼稚園犬も仲間に来て遊び
幼稚園踏切までを送られる

同柳
堂白

幼稚園お辨でたらぬすこやかさ
幼稚園まわらぬ舌の節があい

同柳
堂白

幼稚園歌ばかりの子が並び
腰かけて足が浮いてる幼稚園

同柳
堂白

幼稚園ダンスへみんなげつまづき
幼稚園はめんど泣きびれてる幼稚園

同柳
堂白

幼稚園よその兒ばや強う見え
幼稚園妻がしられてある幼稚園

同柳
堂白

幼稚園あんなり道が遠すぎて
幼稚園今日の歌唱ふて歸る幼稚園

同柳
堂白

幼稚園雨がふつてチツパツパ
幼稚園園今日も獨りれるさ云い

同柳
堂白

幼稚園に於て隅で泣いてる幼稚園
幼稚園折紙で父をこまらす幼稚園

同柳
堂白

席題 園本
園本も廣告程に賣れて居る

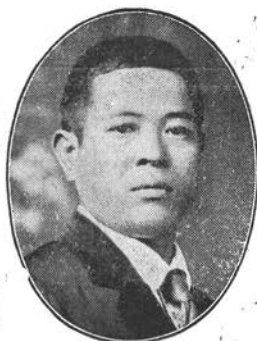
同柳
堂白

園物の様に園本飾つて居る
園本で學者小僧も出來そなり

同柳
堂白

夜店にもある園本に飽きがくる
（以下次號）

同柳
堂白



社 告

社會民衆黨公認

南區市會議員
候補者

庄シヨウ 健ケン一イチ 君キミ

本社宣傳部長庄万よし君が来る六月一日改選の普選第一回の大阪市市會議員として立候補されました。川柳詩人としての万よし君は同時に市政の料理人として最適任と信じます。その切れ味は市政に參與せしめなければ知ることが不可能であります。先づ柳友庄健一君を市政壇上に送りつけることを最急務とします。君を知ること知らざるの別なく一票を投ぜられんことを！

大阪市西成區千本通五ノ七

川柳雜誌社

代表者 主幹 麻生 路郎



後編

▼今、大阪では市會議員の選舉で大騒ぎだ。生活をよりよくするための川柳、即ち生活を基調にしてよりよき詩を得やうとしてある我が社の同人からも一名立候補することになった。此度の市議改選は普通第一回の市議戦でもありなかく激戦を極めて居る。いつの市議戦にも友人數名が立候補する。そして多くはその區での最高點で當選してゐるが、川柳雜誌社の同人から起つたのは今度が始である。同區からもう一人私の同窓Aが起つてゐる。Aは既に二期間も市議を勤めて市會での、しやべり手の一人である。元は短歌や俳句をやつてゐたが川柳も甘い男だ。この方は固い地盤をもつてゐるが當選は豫測されるが、同人の方は豫測をゆるさない。私としては二人とも當選させたいと思つてゐる。政治家は私が川柳に對する態度、即ち生活をよりよくすることを心掛けねば

誰れが出たところでリッブグアンウィングルと同様に結局妻君に塗面をつくらせる位が落ちてゐる。

▼こんど、ビルディングといふ欄を設けた。こゝでは三行でも三行でもいゝからなるべく箇切れのいゝものがいい。せいゝゝ、みんなて書いて欲しい。長短は御隨意だ。

▼本號では省二氏、柳雨氏同人好古の三人が活躍して古川柳研究號の觀を呈した。新しい川柳に對する新しい意見も大いに聞きたい。

▼本號は近作柳櫓の入選句が四五十句多かつた。これから應募が十句以内になるので多少の減少はまぬがれまいから大いに奮闘をされた。

▼川柳塔の作家には今のところ句數制限はしてゐないから遠慮なく出句されたい。制限があるやうに思つてゐる人もあるらしいから一寸添記に置く。

▼近ごろは、よく疲れて寢込んでしまふのと、俗用とかち合つたり、句會の日が二つも三つも同じだつたりして止むなく缺席としてしまふ。螢ヶ池支部へも大

部出掛けない。御旅支部も支部の名を命名して第一回の會へ出席した。櫻井君の宅で開かれ午後二時から夜の十時まで約十二時間川柳について語つた。近ごろ尤も熱心にしやべつたレコー

ドであらう。聞くこゝに熱心な人達であらう。喋べるこゝへ上達するだらう。喋べるこゝへ日本ハインストといふ會社へも川柳の談に出かけた。亡くなつた同人松雨の從弟の西村君に會つた。

▼五月一日夜、丸萬ビルの五階で大阪夕刊主催の東西川柳家漫談大會が開かれた。社の關係から路二君が司會した。南北、紋太、竹人、三太郎、溪花坊、迷亭、小太郎、水府、雀郎、路郎、飴坊が出席した。催しとして面白かつた。

▼久しぶりに三太郎、雀郎兩氏に逢つた。夜と共に語る。翌二日の晚雀郎氏は商用で東京へ立つ水府氏と共に歸東、三太郎氏は居残りて其夜は拙宅で、二柳子や葎乃を相手に飲み且談して三日の朝岸の里の驛で別れた。

▼引續いて四日の夜は本社の句會、八日の夜は月評會、十一日の夜は堺支部の例會へ出席した

六二
この支部へ出席するのも全く久しぶりだつた。

▼東京支部の柳路は平塚支部を訪れて駒人と通信をくれた。駒人は私と同じ子煩悩で、こども

の事をよく報じて来るが、なかなか可憐なつたらしい。

▼本社客員楳元紋太氏が神戸柳壇のために、ふあうす社を起し柳誌「ふあうす」を出すことになり、六月早々創立句會を開くことになった。氏のために、よりよき發展を祈つてゐる。

▼松山の前田五健氏が故窪田而笑子翁の遺稿「一糸集」を上梓することになり目下印刷中である。こんなものが出来るか知らぬが同氏の美舉に對しても購讀をすゝめたい。何れ出来上つたらお知らせしよう。

▼支那をほんとに南船北馬してゐる同人多間、各地から頻りに書を飛ばせて私の遊心をそゝる大連へ行く船の中では容の中から大連の川柳會へ出かける天津の和田默然人氏を見つけた。大いに柳談に花を咲かせたさうである。廣いやうで狭い支那である。賛助員長崎柳秀氏は五月六

日の午後にかーストリヤの首府
ウキンに着しメトロポールホテ
ルに西洋のワランジを解かれた
さうです。いよく五月十日か
らは伊太利入り、こゝでは唯の
赤毛布ださうです。健康につい
ては特に留意してゐるから安心
してくれとのこと。

(病床にて路郎生)

▲岩本素人は松山で氣焔を擧げ
てゐる。此間も近況の通知があ
り毎晩句會々々云つて大阪の
市會選舉の様に目の廻るほご忙
がしいと。

▲安井ひろし君は萬よし君の市
議立候補に事務長として今月は
大活躍、お陰で編輯子はのろけ
を聞かずに濟んだがさて聞きつ
けて見るともの足りない氣もし
た。

▲北濱支部の谷村稔君は盲腸炎
を病つて去る十四日回生病院へ
入院せられた由、一日も早く全
快せられん事を祈る(琴人記)
▽同人竹内多聞氏上海滿洲方面
の視察に行かれる途中長崎の山
川草木氏に逢ひ五月二日上海丸
にて上海に向はれまいたいづれ
川柳のみやげを持つて歸阪され

るでせう。

▽同人萬よし氏は四月十五日夫
人同伴で春の寒直溪へ行樂もさ
れまいた。

▽同人詮間三猿堂氏の宅では五
月十日男子を擧げられ若き父と
しての喜を感じてゐられます

▽社友水田黄彩氏は桐郎と改號
され今後一層柳道に精進される
との通知がありました。

▽同人酒井駒人氏(神奈川)は毎
月横濱の句會に出席されて大い
に奮闘されて居ります。

▽同人淺井冷々子氏の嚴父が五
月三日午前五時永眠されてまし
た謹んで哀悼の意を表します。

▽社友島田翠峯氏は四月廿五日
退院され目下自宅で療養されて
ゐます。

▽同人庄萬よし氏は市議に立候
補され演説會に日も足りない有
様です。同人連は是非當選させ
たいとやきもきしてゐます。

▽同人青山孤舟氏は四月十八日
吉野から「暫は鐘の音なる如意
輪寺」の句を寄せられました。

▽同人伊藤藤緑之助氏は四月十四
日清水寺(出雲)へ参拜されまし
た「清水の塔から見える春をは

めの句」を寄せられました。

▽同人朝田新水氏は徳島へ行か
れ知己へ川柳雜誌の讀者を募つ
てゐますとの通信がありました

▽福田山雨樓氏は四月十八日有
馬の花を愛でられたとお頼り
がありました。

△五月十日午後鶴峯氏と私と岸
の里の本社を訪れ路郎先生と杵
屋七美佐さんの四人で住吉區南
田邊町伊藤藤緑の牡丹を見にでか
けました廣大な庭に二千數百株
の見事な牡丹でした當日川柳を
語らずに夜の十時過まで行樂を
共にいたしました。

▽別府支部木村見卓氏はしばらく
便りがなかつたので君の病身
を心配してゐた處が社用で博多
熊本方面へ旅行されてゐたこと
こと壯健を喜びます。

▽魚崎天絲氏は健康を害された
ので島根縣簸川郡へ療養に行か
れたさうです全快を祈ります。
△松本助六氏は紀伊洲湯崎溫泉か
ら「南國の湯に酔ひ緒口を干し
てゐる」の句を寄せられました。

△防府川柳會の主催で山口縣川
柳大會を防府町宮市成海寺別堂
で五月十九日午前十時より開催
されました。

▽柏子木川柳社では五周年紀念
句會を五月十一日午後七時より
神戸市港町一丁目神戸酒類商組
合で開催されました。

△本社客員篠原春雨氏の「春雨
句集」がその刊行會から刊行さ
れることになりました。御希望
の方は本社事務所へ御申込み下
さい。申込切は六月卅日迄で
す。句集は和紙和綴箱入美濃紙
四截句數二千句以内二百余頁一
部堂圓五十錢

▽私は四月十八日吉野へ花見に
でかけましたが雨に逢つて歸り
ました。川柳雜誌の事務に追は
れてゐますでながく遠方へ出
かけられません。

▽本號の編輯は十九日路郎先
生、琴人、亂耽、町二氏と私と
で致しました。(二柳子記)

移 轉

篠原春雨氏は甲府市百石町一二
八へ▽木村見卓氏は別府市下野
口へ▽大山露斗氏は廣島市舟入
町ノ一三五へ▽松並光哉氏は久
留米市六ツ門淺尾林一方へ

改 號

木山春陽氏は青砂郎▽姬田賀名
芽氏は夕鐘

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」を封筒に未記すること。

▼締切は厳守されたい。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の原稿紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第六卷第八號課題

六月五日締切
(各題十句以内)

▼無口
蛭子省二選
中野柳陽選
酒井駒人共選
中見光路

第六卷第九號課題

七月五日締切
(各題十句以内)

▼倉
大島濤明選
松丘町二選
伊藤緑之助共選
石川双葉子

每號募集

▼近作柳稿(拾句迄) 麻生路郎選
▼各地柳壇(會報)
▼文章(評論研究感想吟行漫文)
社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號 一部 金參拾錢
新特輯號 一部 金五拾錢
八月特輯號 一部 金四拾錢
半箇年前金(特輯號共) 壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共) 參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませば御相談に應じます

▼御送金は郵便口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和四年五月廿五日印刷
昭和四年六月一日發行

第六卷 第六號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪府西成區千本通五丁目七番地 生 幸 二 郎
發行所 大阪府西成區千本通五丁目七番地 柳 雜誌 社
發 行 處 大阪府西成區千本通五丁目七番地 柳 雜誌 社
振替大阪三五一四番

大阪府住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六七番

書店擲賣

(大阪) 大賣捌 サクラヤ書房。(明文堂 其他市内各書店)
(東京) 仲見世 玉森堂(神戶) 米田、後藤、(函館) 石塚
(石川縣小松) マコト屋 (京都) 三宅 (松山) 弘文舎

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざ／＼新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私も同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちに幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことばかりう。

(路那生)

古 本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

金田晴正著

桃太郎の研究

洋裝美本 全一冊

定價 五十錢 郵税 二錢

日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に我國民性にピッタリ合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて来る



灘 津 攝

嘉納合名社會社釀

川柳とは何ぞや——の數萬言を聴くよりも本書を繙
け！實に愉快に而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

川柳
漫畫

累卵の遊び

定價 壹圓 (送料拾錢)

實に氣持のいい本だ云はれてゐますのでよろこんであります。皮肉で面白いのでよく贈物になさいます。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。(霞乃)

内容概目

川柳
漫畫
累卵の遊び

日月は輝く

大衆と共に

麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博したる川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により収録したるもの——。
「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——。
「講談俱樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの——。

◇軽い讀物として 紅茶の後で、電車の中で……

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 (毎月一冊一日發行)
昭和四年五月二十五日印刷 昭和四年六月一日發行

川柳雜誌

(第六十五號)

定價 三拾錢

大阪西區千本通五番五
大阪五番五

不朽洞

東京市外杉町並高圓寺二番
東京並七七八八番